

万象 平成十四年十一月十三日第三種郵便物認可
平成二十九年十月一日発行(毎月一回一日発行)
第十六卷 第七号(通卷一八七号)

万象

B A N S Y O

十月号

2017. 10



十月の句

つくばねや人に親しき赤とんぼ

内海 良太

「つくばね」は唄歌の地として有名な筑波山のことと推測する。なぜなら初夏に筑波山に登った時、山頂付近に沢山の赤とんぼが群れ飛ぶのに遭遇した事が何度かあるからである。赤とんぼは夏に平地で羽化すると暑さを避ける為か山に移動し、涼しくなると平地に下りて産卵することである。

この句の眼目は赤とんぼを人に親しいと捉えた点である。言われてみれば確かに赤とんぼは子供の頃は、遊び相手であつたし、今も自転車のハンドルを持つ手や肩に、不意に来て留まってくれる。

句集『青嶺』所収

(奥 太雅)

万象

B A N S Y O

平成二十九年
十月号

心
高
身
低

廣瀬淡窓語録

万 象

平成 29 年 10 月号

名誉主宰作品 夏 祭 大坪 景章 4
 主宰作品 山 揚 祭 内海 良太 5

作 品

梅雨満月 小林 愛子 6
 凌霄花 飛高 隆夫 6
 レモン水 江見 悦子 7
 浮いて来い 福島せいぎ 7
 野川べり 原田しずえ 8
 円 虹 山田 春生 8
 続・万象と共に⑩ 『続・芭蕉の葉』が面白い 内海 良太 9

同人作品 内海良太選

同人作品の佳句 内海 良太 10
 第十五回万象俳句賞発表 33

俳句賞作品 「渡良瀬の夏」 中村 千久 36

佳 作 「茅花流し」 卯辰 美苗 38

” ” 「アウシュビッツの夏」 恒川 清爾 39

選 評 「大西日」 曾根 満 40

同人特別作品

水郷めぐり 須賀 允子 48
 花さびた 久保村淑子 49

内海良太句集『青嶺』自選句鑑賞⑦

着ぶくれて四天王寺の西の門 須賀 允子 50

小豆干す東海道に莫塵広げ 神田美穂子 50
 小林愛子句集『阿夫利』自選句鑑賞⑦

紺屋町風鈴売りの来てゐたり 内海 保子 51
 髭の中口が開きて土用餅 大湾 宗弘 51

特別作品評 (八月号) 水野 加代 52
 同人作品評 (八月号) 大木 茂 53

俳書探訪 山本とく江 55

万象招待席 夏 燕 高田たみ子 56
 海 鼠 壁 大村かし子 57

万象招待席評 (七月号、九月号) 瀨谷 和代 58

万象ノオト 「引越し」 石原好宏、平子甲奈、前島幸、大田佳美、谷内瑞江、福田みづ子 60
 郷土の俳人⑪ 静岡 魂の俳人 村越化石 小川 明美 62

蕪村処々⑦ 枯野抄―芭蕉から蕪村へ 福田 雅子 63

巻頭作家 (九月号) プロフィール 恒川清爾 (鎌倉) 浅井 敦子 64

万象作品 飛高隆夫選 65

万象作品の佳句 飛高 隆夫 82

選者のはなし⑫ 山本 右近 84

第十回「万象」神奈川県支部吟行会案内、珈琲タイム⑨ 85

「万象」中央句会報 (七月)、「万象」同人句会報 (七月) 86

東西南北 88

夏 祭

大 坪

景 章

(名譽主宰)

青あらし蔦は自然にゆれてゐる
好きなひと妻にゐるはずさくらんぼ
梅漬に朝のあいさつ顔染めて
御下がりをくはへ手を振る夏祭
トラツクの祭り太鼓に力得て
ご近所と夏の俳句を足からと
秋祭まなこつぶれば夢に出づ

山揚祭

内海良

(主宰)

浅草の蛇屋に売らる蛇の衣

あぢさゐるの奥に松虫姫祀る

印旛村 皇女松虫姫の寺

蛸が鳴けば濃くなる森の影

河童忌や遠野の田水沸けるころ

九十九里飛ばされ癖の夏帽子

山揚那須烏山・山揚祭や鮎焼く香り町ぢゆうに

夏燕山揚の山高く越ゆ

梅雨満月

小林

愛子
(副主宰)

蛇の髭の花咲きいでぬ稽古笛
曲るとき腿あげ女神輿かな
恍惚と食ぶる祭のたこ焼を
水溜りに鮎逃れるて早川
白き蛾のしづかに昇り梅雨満月
独り居に夜ごとの守宮親しけれ

凌霄花

飛高

隆夫
(万象作品選者)

高々と雲の白さの山法師
山法師浮かべて水のごとき空
山藤の盛りや北の国の夏至
紫陽花の花の手触りゴムに似て
紫陽花の草の色へと戻りけり
のうぜんの咲き継ぎ空の上機嫌

レモン水

江 見

悦 子
(編集人)

脇芽欠くトマトの青き香りかな
自転車の道化師急ぐ炎天下
やはらかき水草の緑神田川
青岬頂きへ驢馬じぐざぐと
ガウデイの大聖堂出てレモン水
ひと声に夕べかなかな浄土かな

浮いて来い

福 島 せ

い ぎ
(同人会会長)

宰相の嘘つく世なり浮いて来い
向日葵やひとり笑へばみな笑ふ
ほととぎす檜の風呂に木の枕
竹夫人抱けばささくれをりしかな
よろよろと犬が水飲む熱帯夜
湯あがりの子のおちんちん天瓜粉

野川べり

原田しず

（願問）え

谷保天神綾子師しのぶ泉かな
無傷なる梅の実拾ふ谷保天神
草踏まへ桑の実を採る野川べり
玫瑰へ灯台の影のびるたる
足場組み灯台はいま更衣
鎌を鍛^うつ火花ころがる梅雨の土間

円 虹

山 田

春

（願問）生

白南風や満艦飾の干魚
八方に雲の峰立つ甲斐の国
筑波嶺に片脚かけて夕の虹
夕顔や小魚あらふ島の路地
円虹に手をふつてゆく登山隊
雪溪を掘つてとりだす缶ビール

『続・芭蕉の栞』が面白い

内海良太

近く、福田雅子さんの「続・芭蕉の栞」が刊行されます。

毎月「万象」誌に連載されていた「芭蕉の栞」(49)と「芭蕉の周辺」(1)と(15)を一本にしたもので、平成23年に出版された「芭蕉の栞」の続編となります。

「続・芭蕉の栞」の特徴は芭蕉の門人が多く登場することです。芭蕉十哲と言われる者や縁ある門人はことごとく登場し、十哲の幾人かは、芭蕉の俳諧に対する考え方をそれぞれの見方で主張して、各人が強烈な個性を發揮してまことにぎやかです。

その中で去来と許六の「俳諧問答」の各章が目を引きまします。ここは福田さんも力をいれている章で、問答の内容は師の説をどう理解し、どう生かすべきか、去来と許六とで二年にも及んだ論争です。一家言ある者同士なので後に引きません。

去来はどちらかというの大らか、許六のほうが論理的で、去来は許六に突っ込まれると、何とかかんとか言ってしどろもどろ、それが去来の魅力という人もいます。

許六には芭蕉が言った「発句はとり合せ物と知るべし」を發展させた「取り合せ論」があります。取り合わせは、二つの異質的なものを何らかの意味で配合することですが、異質ということは素材的な意味の異質か、意味内容の性格的な異質かに話が及んできます。許六の論はどちらかというと前者のようです。

現代俳句でも大須賀乙字の「二句一章論」は今でも古びていません。一句中一個所に大休止を置く(切れ)の考えで、切れた上下二個の概念のひびき合い、融合を説いています。「万象」でも、即物具象の写生と並行してこれらが語られてもいいと思います。

「続・芭蕉の栞」はどこから読んでも面白く、その章、その章で独立した話になっています。これからも芭蕉俳諧の奥深い話に触れながら俳句実作に励みたいものです。芭蕉を知ること、俳句がこれまで以上に面白くなってくるはずですよ。

同人作品

内海良太選

○は佳句に選ばれました。



札幌 松原智津子

浮き沈みポプラの絮の気まゝにも
息深む薔薇のアーチをくぐる時
玫瑰や海鳴り止まぬ漁師町
日暮時ことさら散るや沙羅の花
石狩川灼くる河原に筈を乾せり

札幌 岡本敬子

花さびたクリーム色の房揺らし
山法師万の小さなつむりかな
草の香を日傘の中に容れて来し
清水掬ふかはるがはるに蹲り
えぞ富士の清水に指の痺れけり

札幌 瀧谷和代

あいの風遮ぎるものなき岬
白樺のあはひ間に夏の湖
濃き淡き縞なす丘のラベンダー
ポプラの絮高層ビルの遥かまで
打ち水や颯の溜水底をつく

札幌 大内和憲

焦がすごとと鉄路離れぬ炎暑かな

翅たたみ影消ゆるほど夏の蝶
初物の茄子の色濃し雨しとど
突き立ちし流木燃ゆる大夕焼
サハリンへ荒き風筋花さびた

札幌 紅 露 恵 子

耳もとを掠むる風や浜昼顔
蔓あぢさゝる石のサイロを登りつめ
真夏日の手肌よろこぶ水仕事
トタン屋根滑り落つるな鴉の子
あーあーと世慣れせぬ声鴉の子

札幌 玉 田 瑞 穂

捨て舟の腹に昆布干す浜日和
青鳩の汐飲むころや南風吹く
草笛の葉にこだはれる小半時
○掬ふたび刻刻満つる泉かな
でむしに草の影降る風の径
砂金採り心のままに夕焼掘る

札幌 大内 マキ子

大道芸小銭ばかりや夏帽子
山鳩の声ちかぢかかと青胡桃

岩清水日の斑もろとも掬ひ飲む
サングラス母と女の貌持てり
水底の小石の照りや夏柳

江別 佐藤 哲

遠郭公満水の田を伝はり来
またたきぬ真夜の烏賊火や日本海
どんぶりに桑の実を摘む媪かな
かくれ岩同じ方向く海鵜かな
幌馬車のこうべ垂れゆく夏真昼

苫小牧 林 陽 子

河骨の灯る真昼のさびしさに
隠沼に白睡蓮はまだ固し
蓮の葉の水の闇より立ち上ぐる
石畳杖にやさしき苔の花
○朝もよし夕べもよけれ山法師
黄昏に白さなほ増す山法師

苫小牧 落合 裕 子

甜瓜へたの鱗より故郷の香
錦木の花は葉の色香も葉の香
めまとひの渦をめがけて川蜻蛉

ハスカップ摘む洞爺湖は夏霞
浮御堂張り出す湖や夏燕

苦小牧 榎

美 幸

父の忌へ強き香放つ百合一輪
夏空を幾度も蹴り逆上り
断崖の海へ散らばる岩燕
ハスカップ葉裏に光る真黒き実
産毛立つ子を従へて羽抜鶏

湯沢 小松 敏郎

歯を抜きし妻喜べり冷奴
石切りし古き鋸跡土用の芽
真綿搔き蛹は鯉に与へたる
巢燕を攫ふ鴉の急降下
音もせず散る一面の栗雄花

東根 奥山 テル子

周平の里おだやかや稲の花
子に送る野菜に添へし紅の花
酒煙草桜桃供ふ産婆の碑
嶺嶺にしみゆく祝詞山開き
救急部へ夫を頼みて梅雨の闇

上山 森 和子

父の忌や蚊遣火細く灯しつ
ポケットに花付胡瓜入るだけ
軌り合ふ芥流木梅雨出水
落つる刹那重さの生る花木槿
炎昼の鯛のやうな川一筋

新潟 佐藤 三男

荒梅雨の洗つてくる友の句碑
梅雨に病む農夫の足裏汚れをり
じゅんさい採り顔つくまでをかみをり
赫々と燃えて昇れる夏の月
紫陽花の百日咲きて崩れけり

新潟 佐藤 雄二

祭果て人語の絶えし城下町
打ち込みし築太杭に山應ふ
鮎釣りへ宿の昼餉の届きけり
火打袋朱きを腰に祭笛
明易の一句失ふ寝覚めかな

新潟 高橋 ひろ

十二単着せられたよな金魚なり

出刃菜切りまだある暮し夏の雨
汗染みの帽子目深にしたりけり
笹の葉をかぶせてありし活泥鰌
齒ぎしりの癖持つ猫と昼寝かな

南魚沼

森山 曉湖

分蘖のすすみて田水沸きにけり
風入れや幾何を学びし古ノート
八海山に立つ夕虹の太きかな
作務僧のいつも小走り青嵐
雑魚掬ひ笹跳ねまはる源五郎

宇都宮

阿久津 勝利

衛兵のまばたきもせぬ青葉光
ムンクの絵に防弾ガラス涼しかり
王宮の国旗気高く青葉風
白樺の肌の際立つ白夜かな
青葉照る人形姫の背に軍艦

芳賀

大村 かし子

茗荷の子菰の下より突きぬけり
花合歡や畦にくつろぐ若夫婦
咲きみだる夾竹桃や義姉逝けり

石とれば蟻の卵のあふれたり
みどり児の力む両足半夏かな

佐野

亀田 やす子

草茂る石灰山の白けむり
梅雨栃木市(白旗山)雀翔ちては戻る綱手道

川端の物干し竿に奈良晒
黒堀や咲き誇りたるアカンサス
診察を待つ間冷房効きすぎる

佐野

増田 幸子

雨音に強弱ありて胡瓜揉む
青ぶだう甲斐の山々雲挙げて
一里塚榎の青葉まぶしめり
涼しさや神鏡に映ゆ友の顔
狒犬の耳朶に鬼の子吹かれをり

佐野

駒形 祐右子

散りながら咲きながら散る凌霄花

日照雨虹の弧に入る三疊山
梅雨那須教生石より白河へ三句晴間硫気漂ふ熔岩のみち

温泉神社の鈴黒々と夏木立
那須岳の岩累々と雲の峰

佐野 加藤 季代

炎天や影も喘いでゐたりけり
川ひとつ越えて匂へり栗の花
ほとばしる水に涼風生れけり
風波の遠ざかりゆく稲の花
砂を噴く泉しづかや晩夏光

佐野 鍋島 広子

壬生寺の桜大樹に蟻の列
ほととぎす火口湖の面眩しくて
利根川の渡船の木椅子梅雨湿り
稲荷山古墳へ吹かれ飛蝗かな
丸窓を塞ぐ青葉や無言館

佐野 阿部 澄

すもも熟る慈覚大師の産湯の井
熟したる李すすべすべ大師堂
糸瓜棚へちま一つに傾けり
ヘルメットの跡くつきりと帰省の子
放水や精霊とんぼ何処より

足利 大木 茂

汗の子の帽子斜めに帰りけり

二日降る雨に収まる水喧嘩

草刈女遊行柳に憩ひけり

陸奥遥か吉次討たれし木下闇

梅雨明けの空朱鷺色に昏れにけり

土浦 松尾 芳子

マリナーに高く縮跳ぶ半夏かな

蟻走る軽がる担ぐ蝶の翅

本陣跡ビルの高さの茂りかな

一刷きの青を戴く夏見舞

辻廻る 三百年の祭笛

さいたま 手島 南天

下毛の利根の両側麦の秋

竹寺の空を愉しむ今年竹

大山木生きよ生くると朝日浴ぶ

蟬は羽化瘦身の吾は縁に座し

淋しいときは蝙蝠に石抛れ

さいたま 山本 右近

線刻の仏足石に実梅落つ

葭切の葭をはなさず吹かれをり

沙羅散るや尼僧の箒音たてず

もの言はぬ灯にぶんぶんの八つ当り
をんな出す井戸しつらへて夏芝居

さいたま 岡崎 春菜

蟬の穴覗く鴉の地を跳ねて
黒揚羽我に降り来るゆつくりと
日焼子のはしやぎて初の通信簿
下校の子かしまし明日は夏休み
皆こちら向き向日葵の空眩し

志木 中村 千久

香水の黒き小瓶に銀の文字
雷鳴や廊下の端の大鏡
三伏や歪みてかかる赤き月
沢音の耳を離れず螢の夜
月の無き夜の更けにけり遠蛙

所沢 三好 かほる

シエークスピア生家の垣に青くわりん
藻だたみに鶺鴒の親子のまろびけり
ロンドン塔へ川波荒き晩夏かな
ゴッホの絵観て炎天の街に出づ
ワイン汲む森の茸の夕餉かな

所沢 水野 加代

雪形のうさぎいづこへ空真青
湖風やえぞ春蟬の交響す
異形なる昭和新山緑濃し
万緑を来て剝製のえぞ羅
夏つばめ運河の果ての船溜り

所沢 森岡 恵子

○草いきれ秩父一揆の高札場
急流にさからひゆけり罔鮎
余呉の湖棚雲を染む大夕焼
山裾の灯しあかあか鳩の湖
夕映えやさか白波の余呉の湖

入間 山口 素基

朝の日や沙羅に目覚むる烏蝶
石鼎の山にのぼれば蟬の鳴く
夕暮れの海を見てゐるサングラス
七月の風立つるとき海光る
水中に風鈴吊るし金魚飼ふ

千葉 田 中 道 江

光曳きゑのしま道を夏つばめ
異国語の山門くぐる浴衣かな
仄暗き古美術商店アマリリス
木歩の墓に少し水ある溽暑かな
朝顔市かけ声大きイヤリング
○明日咲くと朝顔の鉢廻したる

酒々井 竹 澤 竹 里

護摩木山是より三里合歡の花
青柿を潰して搾る手の黒し
風吹かば青芒啼く合戦場
草刈れば十葉の匂ひ広ごれり
底紅の白を夕日が染め行けり

佐倉 内 海 保 子

ガード下朝顔市の人通る
青田波目にいつぱいの成田線
豆腐屋にシーツのやうな夏のれん
献血を呼び掛く青年瞳の涼し
駅までを日傘に身体押し込めり

佐倉 大内 佐 奈 枝

建増しの風よく通る夏座敷
唐草の模様涼やか桐箆箆
嫁入り舟待つ鈴なりの日傘かな
あやめ舟手漕ぎにかへて十二橋
星合の空測りしか象限儀

佐倉 三 屋 英 俊

傘さして雨の茅の輪を潜りけり
八月の雲や軍鳩帰還せず
待ちきれず昼の上の平泳ぎ
蛇身見て三輪明神と思ひけり
山鳩と競ふ手の笛青葉風

四街道 奥 太 雅

建売の看板掲げ三尺寝
しばらくは自転車止めて時鳥
花芭蕉触れれば芯のひんやりす
稲の葉に埋れ沢瀉咲き上る
クーラーの好きと嫌ひが一つ家に

船橋 大 坪 貞 子

蕊こぼす泰山木は雨の花

あづきアイス乏しくなりぬ九十歳
石楠花に白山の霧おりてくる
山の辺を降りてひと息冷さうめん
釣好きの父の忌過ぎて鮎を焼く

船橋 山下良江

^{ワイン王} 伝兵衛神谷伝兵衛の窓万緑へ開け放つ
雨上る墨痕涼しき溥傑の書
朝の雨さと晴れ渡る紫陽花忌
黒揚羽網戸に大き息をして
早りとて賜る薯の小粒なり

船橋 大山春江

ふるさとの森の匂ひや五月闇
雪溪のほそき筋なす前穂高
古代蓮の真上ましろきモノレール
青不動の眼金色梅雨の闇
遠き日の恋は黄色いさくらんぼ

船橋 赤堀洋子

草刈つて甘き香の立つ闇夜かな
ログハウス蝦夷春蟬の声の中
枯れさうな柳に大き梅雨茸

仔馬立つたてがみを雨伝はりて
夏蝶のふはと掌に触れ逃れけり

船橋 久保村淑子

沿線の線路のほてり半夏生
夏休みのもう顔をして下校の子
梅雨満月梅雨を忘るるひかりかな
オクラの花オクラの匂ひしてゐたり
花合歡の色深まりて日の暮るる

船橋 大坪あきら

月光に江戸の切子や青の闇
天心へゆらりふはりと紅芙蓉
あぢさるに袖を濡らせり東茶屋
どぜう焼くけむり眼に沁む雷門
足許の磯のかをりや鮎の笹

船橋 山本とく江

玫瑰やいつもどこかに地鳴きかな
蝦夷富士へ雪形兎跳ぶ構へ
旅人へ蝦夷春蟬の昂れり
生き生きと雨粒弾く七変化
合歡の花天女の衣のかかるかに

柏 松原三枝子

梅雨の蝶人にすりよる慣ひかな
青ぶだう昏さの中に太りたる
拭き込みし溽暑の遺影忌の近し
消灯のパン屋に烏瓜の花
さくらんぼ遺影は小さき社員証

柏 内田郁代

洞爺湖へ蝦夷の山路の朴の花
万緑の底の洞爺湖真夏なる
湖へ蝦夷春蟬の絶え間なく
夏燕鯨御殿の空を切る
水無月といふ名の和菓子大祓

柏 古川京子

月下美人かをりゆつたり墨を擦る
夕顔や余白大きく風生句
癌研に車のラッシュ梅雨鴉
明け易し向う三軒高齢者
絶壁を背に奥宮蟬涼し

流山 沢辺たけし

白靴の先楊梅に染まりたる

杉木立庫に白木の大神輿

遠富士や一輪高き紅蓮
合歓の花散るやかすかな音をたて
さくらんぼ目指せ連続逆上がり

流山 穂苅照子

牛蛙の声にふくるる草いきれ
ぶつかつて行く手を惑ふ水馬
半夏生草乾くことなきはけの水
河骨の開く葉蔭の明るさよ
岩煙草の花の散りつぐやぐら墓

浦安 田中幹也

月涼しベッドの向きを少し変へ
熊蟬のはつこゑ老いの身にしむる
暁やどつと打ち出る鏗船
白シャツをざぶりと洗ひ船縁に
菊坂にいま月のぼる鷗外忌

東京 内藤恵子

大岩を抜くる走り根青葉閣
池の辺の岩に根つきし文字摺草
珍しき蛾の掌に止まりたる

濁り池片白草のつややかに
弁天堂不忍池までつづく蓮の青葉かな

東京 谷田部

栄

睡蓮のひらきし今朝の水の張り
真つ青な桑畑より祭の子
滴壺を出て水音のまろやかに
陶片に茶碗の丸み草の花
よくもまあ腹の減る子よ夏休み
蔓先の縫るもの無き晩夏かな

東京 木内 徴子

迷ひきし揚羽に部屋の戸を明けて
紅の蕊最後におとす泰山木
かはほり空川下り船待ちをれば
葉がくれのざくろ小花のおちよほ口
ガラス戸に乱舞板戸に憩ふ揚羽蝶

東京 須賀 允子

サハリンは海霧の向うや鷗啼く
子供神輿ゆく最北の岬村
利尻富士映す湿原系とんぼ
等伯出光美術館(晋舟等伯)展の柳吹く風暑を払ふ

大津絵の鬼の行水大暑なる

東京 降幡 加代子

滝落つる音遠くまで響きけり
鬼百合の弓形になり谷のぞく
紅の漲る蓮の花開く
五月雨や森の奥より牛蛙
故郷に母の好みし柿の花

東京 名和 政代

炎天や昭和のビルを壊す音
鬼灯市赤一色の夕べかな
笙の音の乾き切つたる夏祓
路地裏や出合ひ頭に白日傘
仕舞屋にからみつきたる青葡萄

東京 山本 絢子

征きしまま還らぬ人よ魂祭
万灯にまたたく祖の名み魂祭
一山に響くや僧の盆の唄
夏祓明神さまに平次の碑
支へられ宙ゆく白狐夏芝居

東京 藤田裕子

ゴーヤ苗蔓からむまま売られをり
夏落葉ゆづり葉はみな裏を見せ
道標は桑名へ十里風薫る
長良川蛇行の先に雲の峰
○滴りを汲めりアルミの大柄杓
路地奥に木因の墓梅雨じめり

東京 赤松郁代

浮島の倒木覆ふ一つ葉よ
蜂羽音噎する匂ひの栗の花
やはらかき影生れたり文字摺草
組板に匏をかけし麦の秋
かたばみや路地の真中に手押井戸

東京 島野ひさ

千年の椎の木の洞梅雨茸
夾竹桃白し地蔵の膝洗ふ
七月の野麦峠は雨の中
化粧柳の絮の追ひくる河童橋
雲の峰崩れたちまち電の打つ

東京 佐藤晴子

水かげろふ土橋を渡る白日傘
鮎釣の魚籠の重さを称へけり
海の蒼とどめてゐたり鰹の目
夏の日を吸ひて耀ふ千枚田
昼顔や家並の果ては日本海

東京 加賀葉子

木下閨鳥居の左右やぶめうが

○じやあじやあとサーピスエリアに熊蟬ぞ

金魚すくひコレド室町広場かな
原泉守り湯温を計り夏旺ん
白狐飛ぶ空見上げをり夏芝居

東京 久留島規子

花蘇芳の莢ぶらぶらと勝手口
炎天やガンジー像の丸眼鏡
路地裏の風に蚊遣の匂ひかな
夕立雲せまりて鳶の乱高下
団欒の場に収まりて金魚鉢

小平 吉村光子

日焼子の皓齒ぞ佳けれ立葵

蛙の子育つ水田や朝曇
足元にあそぶ子蟹や朝の風
茄子トマト昔の匂ひ消えてをり
夏休み駆け出す子らに涼

立川 疋田 華子

姫女苑長けし府中の高札場
郭あとポンプ井のあり濃紫陽花
さらさらと人形流す岩清水
国府あと湿りの茅の輪くぐりけり
祭足袋束ねて売れり宿場町

町田 吉中 愛子

塊りて堰に太りし余り苗
麻酔覚め上目遣ひに雲の峰
釦一つ足りぬ白シャツ通夜の客
八ッ橋に水見て足りる半夏生
○青潮の満つるや虚子の初句碑へ
赤シャツと真昼の逢瀬早畑

町田 広瀬 俊雄

この道はスコットランド夏薊
薔薇かをるワーズワースの古机

夏の夕九時を指したるビッグ・ベン
雲低きストーン・ヘッジ芥子の花
宿題の両手いつぱい夏休

背梅 小林 珠江

洋館の窓開け薔薇の風入るる
木椅子みな良き場所にあり滝しぶき
声かけて姉に供ふる盆団子
みそ萩や仏迎ふる棚を組む
迎へ火の風の變りて終りけり

背梅 谷口 直樹

○道祖神祀る藁屋の草いきれ
深淵の水面へ暈ける合歡の花
瓢箪の花の誘ひや同期会
山百合や薔の重さ解き放つ
和菓子屋の竹の長椅子夕涼み
梅雨あがりながら声の鴉かな

横浜 仲山 秋岳

欄干に啼きをる烏梅雨晴間
蟬鳴いて町に明るさ戻りけり
拝殿に祈る婆をり梅雨晴間

厨房につまるる皿や夏料理
湾内にクレーン林立夏来る

横浜 榎 本文代

切株にしみゆく雨や太宰の忌
天道虫指の先よりとび立てり
バリ島の塩振りかけて胡瓜もみ
灯の入りて金魚掬ひの水重し
初蟬の短く鳴いて日暮れたり

横浜 山内 なつみ

相撲観に羅の裾ひる返し
病院へ行くのみの道青山椒
うやうやしく生薬盆に梅雨に入る
沢蟹や大かた徹の兵の墓
百五歳の命尽きたりほととぎす

横浜 浅井 敦子

黒塀の代官屋敷梅雨に入る
散り敷きて坂がまつ赤や海紅豆
黒南風や鳶の腹が迫り来し
男体山の右肩光り夏の雲
夕風の茅の輪くぐりて元町へ

横浜 西 本才子

藁小屋の軒端に吹かれ蛇の衣
つづけざま空濛へぬぐ竹の皮
切株にフルート聞けり合歡の花
灯台の柵に木苺熟れにけり
白壁に葉の影ゆるる青葡萄

横浜 川越 昭子

茴香の細かき蕾ピアノ塾
木に一つ青柿残し剪定す
食卓に小粒の枇杷の甘さかな
ふるさとの海の匂ひや仏桑花
竹の花咲きしと竹に三溪園

横浜 久松 和子

はたた神赤子の拳固くせり
行水や赤子いつばい手足伸ぶ
首筋を拂へば蠅虎落つ
ごきぶりの裏返りては進みけり
赤腹や古寺の池雨の打つ

横浜 寺沢 千都子

飛騨晴天太くて長き栗の花

父の日や漢方薬と杖届く
町内に銭湯一軒吊忍
子等のもの多き干し竿柿の花
湧き水の巡る安曇野青りんご

横浜 大橋 雅子

紫蘇の色ゆるり広ざる白梅酢
友転居楊梅数多落ちるたり
留守の垣纏れて垂るる灸花
黒南風や石油タンクの列車長し
ちらちらときらめく暈や梅雨満月

横浜 福田 雅子

蝦夷富士に昼顔の花よく似合ふ
食べ頃の夕張メロンステップ2
逃げもせず隠れもせずに青蜥蜴
裏庭に廻ればどつと藪蚊来る
雨降らず紫陽花すがれ変化せず

横浜 柳澤 宗正

古墳山麓に点る提燈花
走り梅雨土の匂ひのたちのぼる
五右衛門の絵馬を掲げて寺涼し

竹の花見て観音に一礼す
マンシヨンの押し寄せてゐる青田かな

横浜 山崎 郁子

病む牛と不登校児に青葉風
ほととぎす別棟に飼ふ孕み牛
江ノ電の和田塚ひそと木下闇
螢の夜終の輝き眼に惜しむ
土牢や森の中より時鳥

横浜 田賀 煤恵

夏草や牛の目にある空の色
土用波漁港に船の軋みをり
昼寝より覚めてさみしくなりにけり
新じやがのごろごろ土間の暗がりに
漆黒のピアノの部屋の暑さかな

川崎 山口 千代子

音も形もお国自慢の風鈴市
朝市の三浦の西瓜抱へ上ぐ
あはれにも知人亡くなる夏豪雨
酔を打つて飯かがやける大暑かな
日焼止め指の先まで隠したり

川崎 新妻 奎子

画眉鳥の囀す溽暑の一本道
蓮の葉に吾身包まむ七回忌
向日葵の向きてんでんに咲きゐたる
爽快にラムネの玉の落つる音
小箒を放り出したりはたた神

逗子 卯辰 美苗

冷さうめん仏具磨きの人寄りて
我が浴衣のれんになりて母の家
能登の旅青田に雉の赤き頬
坊守のつむり涼しや奥能登に
山からの風の集まる蓮の花

横須賀 武井 美代子

余り苗植ゑて田の端濃くしたる
合羽着て早苗寒なる田をめぐる
○夜毎くる礫のやうな金亀虫
亡き人の走り書きなり明易き
裏側に地を這ふコード夜店の灯
青簾水の匂ひの風が過ぐ

横須賀 織田 みさゑ

伐採の木々に顔あり夏木立
七夕に恋の詩よみ八十路かな
水打てば昭和の日々の戻りくる
浜木綿や潮の香りの散歩道
明け方の足でまさぐる夏布団

茅ヶ崎 三澤 治子

母の部屋炬燵片づけ夏座敷
風鈴鳴る仏間は母の部屋なりし
落し文古刹に尼の恋の歌碑
富士川や二橋かけて夏つばめ
父母の墓滴る山に囲まれて

伊勢原 佐藤 和子

萍の広がりぬるき田水かな
急行につづく鈍行虹の中
海の風やがて青田を吹きわたる
息災を言ひて胡瓜をかじりをり
○ゆつくりと蟬となりゆく夜更けかな

松本 中條 今日子

外人も茅の輪くぐりに挑みけり

仏法僧風なき夜明け鳴き続け
藍の香のほのか漂ふ夏暖簾
舞ひ降りし小鳥の羽根や百合の花
老僧の猫を抱きよせ原爆忌

静岡 大村峰子

破れ傘流れに僅か湯の匂ふ
朝の日に蜘蛛の糸の七色に
形代や使ひ初めなるポールペン
大茅の輪雨後の日差しに匂ひ立つ
茅の輪くぐる氏子の長の破れ提灯

静岡 曾根満

茶摘籠乗せて庭よりモノレール
灯籠のマリアの像へ植田風
無住寺の仏頭へ鳴く麦熟らし
麦秋やここは遠州浅羽村
櫛の枝に郭公声を置き去りに

静岡 藤原千代子

あぢさゐや石鹼香る介護園
日輪のはみ出す梅雨の潦
団子屋の前が混み合ふ夏越祭

水無月祓夕日まみれの顔揃ふ
提灯に御器屋の文字夕祓
○菅貫の列に馴染の塗師木地師

静岡 海野 勲

歩行器の先へ先へと黒揚羽
道祖神いたどりの花匂ふ垣
弓張と彌宜先達の茅の輪かな
産土へ詣で山女を家苞に
夏祓川原にて焼く古き護符

静岡 海野みち子

手水鉢の縁に尺蠖伸び縮み
母の忌や庭に海芋の凜と咲く
梅雨寒や病み細りたる骨拾ふ
妹の供花にまつはる梅雨の蝶
有る物で済ます夕餉や芙美子の忌

静岡 宮崎知恵美

剪毛の羊時々唸りたる
がまずみの谷の底より鳥の声
列なして子鹿の渡る湖岸かな
水馬の水輪菖蒲へ体当り

菖蒲園行く先々を梅雨の蝶

静岡 宮崎 みゆき

板二枚渡す木橋や濃紫陽花
廃校の大樹となれり合歓の花
老鶯や遠嶺へ雲の湧き上る
訝せる櫛切る音夏祓
鹿の子の近づいてくる峠道

静岡 荻野 加壽子

掌に影のうまるる螢の夜
一ト雨の洗ふ茅の輪をくぐりけり
梅雨夕焼忘れ物めく影法師
魂のシグナル恋の螢かな
雲と語り風と語りて端居かな

静岡 長 鳥

蟻の列石の下へと続きたり
森青蛙牡丹のやうな泡三つ
一番茶終るや墓の供花替へに
種継ぎの一畝の麦黄ばみたり
落成を祝ふ早天ほととぎす

操

静岡 小 川 明 美

父の日やチエロの音色に包まれて
紅白のカーネーション持ち墓の径
青梅をリュックに詰めて神の庭
神鶏の尖るひと鳴き青葉開
撫牛の額の凹み新樹光

静岡 藤 本 節 子

人声に近寄る恋の螢かな
青葙のほひ籠もれる集会所
蟻塚を雨が暴きて雨上がる
○雨上がる卵かつぎて蟻の列
外灯の鈍き瞬き河鹿笛

静岡 大 長 文 昭

父の手を固く握る子夜店の灯
太宰忌の芯まで白き梅雨茸
蜥蜴の尾権現廟に跳ねるたり
蟻の列蠅取蜘蛛に乱さるる
喰らひつく首をはなさぬ喧嘩蟻
○峰よりの風吹き渡る夏座敷

静岡 加山ひさ子

恋螢ひとつ点りてひとつ消ゆ
触角をくの字に蟻の会話かな
門火焚く夫の齡をひとつ越え
西瓜食ぶ戦争知らぬ三世代
盆踊り足の十指に力かな

富士 神田美穂子

梅雨晴を商ふ土間の筒抜けに
飯粒の沈む門川梅雨深し
夏至今日の一日雨の降りどほし
ゆすらうめ束子の乾く外流し
花山葵滝の轟き近くして

富山 若島久清

法話にも世相取り入れ寺涼し
七夕の飾り夜風にざわざわと
羽抜鶏尻目に猫の手足舐め
まだ霰く投網を軒に夜干しかな
甚平の似顔絵画きに人の垣
○海の日を山の手入れに使ひ切る

射水 成瀬真紀子

三ノ窓に梅雨の雲満つ劔岳
人力車夫漆塗りめく日焼かな
○揚羽蝶生れ抜け殻に模様失せ
無防備に喉仏見せ生ビール
熱帯夜論点すでにずれてをり
赤飯の蒸籠三段祭笛

金沢 岸川素粒子

婆の荷に磯の匂や端午の日
百連の凧の先なり昼の月
椎の花男盛りの独り言
恍惚と授乳の聖母百合香る
余白なき絵馬の願ひや百日紅

金沢 田村愛子

伽羅路の一品だれもが喜べり
谷清水あふるる時忠配所の地
松蟬の声とぎれがち平家谷
梅檀の花へ一日雨霧らふ
○山峡の青田昏れゆく早さかな

金沢 新保ふじ子

くちなしの香のただよへる雨となり
くちなしのつばみほどける夜半の雨
届けらる氷室まんぢゆう彩やさし
リラ冷えの夜はのど守りスカーフ巻く
○犀川はひすい色なり星まつり

金沢 井村和子

巢立鳥言^{いふ}奈^な地藏の肩汚し
短夜の猿に食はれし夢一つ
萩焼に玉子涼しく割りにけり
夕焼の榎めゆけるまで渚行く
更衣日にち薬を忘れまじ

金沢 中條睦子

夭折の妹の命日朴白し
一雨の後の草の香ほたるの夜
風入れの鬼籍や当歳零の文字
浄土句碑五月雨萩の白点す
白日の河鹿の声や祖母の里

金沢 今越みち子

夏の日や眩しき庭の石畳

松ぼくり落ち三伏の閑所跡

灯取蛾の寄れる羽音や夜の静寂
寺子屋の手擦れの論語お虫干し
花閉ぢて落つ佇まひ白木槿

金沢 伊川玉子

○ふる里や能登路いろどる合歡の花
母に似し子の声透る星祭
夏蝶のもつれ通しやほまち畑
裏山に葛の風吹く夢二の碑
蟬しぐれ猫かけ登る柿の幹

金沢 伊藤美音子

道草の子が触れて行く含羞草
はきはきと答ふ少年ゆすらうめ
念入りに磨く厨や半夏生
生くるもの跳ぬる水音蓮浮葉
ラムネ抜く擦り傷絶えぬ膝小僧

金沢 高田たみ子

逃げ惑ふ猫追ふ烏光秀忌
中学生の職場体験梅を売る
ひきがへる木魚の音に鳴き出せり

堰音のリズムからやか合歡の花
演奏会果てて余韻の夏の月

金沢 佐野和子

尼寺の茶会列なす夏衣
師の墓所や沙羅の蕾の葉隠れに
水師兵の碑に降る花棗
蓴菜の池を擦りゆく夏燕
桜の実含みて下る殉教碑

金沢 後藤桂子

合歡の花頬紅さしたき夕ごころ
曝涼や地獄絵軸の邪鬼叫ぶ
夏燕川面の色をすくひ去る
黙々としてつべん崩すかき水
雲の峰海豹跳ぬる北の海

金沢 豊田高子

兵の首級の跡や草茂る
三成の陣跡茂る馬防柵
大夏野朝の風立つ合戦跡
梅雨冷や刀剣奉る美濃の宮
白山の樹海に籠る瀧笏

内灘 塩井志津

エンタシスの柱廊わたる風涼し
鷹狩の技の披露も尾山祭
日照雨やりすごして氷室開かな
青笹を敷き奉納の氷室雪
○金沢へ氷室雪昇く四里余り

七尾 谷末枝

わだつみに夕焼け山に一番星
梅を干す母のしてゐたやうにかな
なぎなたの構へ涼しき肘であり
短夜や永久の眠りの薄化粧
水の香に風の香に穂の孕みたる

敦賀 石田野武男

父の日や腑をしめつけろし
岩田帯しめ大つぶの梅を干す
緑さす目を深彫りに泣き地藏
日盛りや水掛地藏濡れづめに
やきもの師ほのほに焦げし髪洗ふ

敦賀 山本麓潮

禁門に残る弾痕風の死す

人住まぬ蛇神の島雷走る
一湾に一舟もなき梅雨晴間
合歓咲いてここより皇女の降嫁みち
撫牛を撫でて茅の輪をくぐりけり

敦賀 山本 みゆき

夏燕和蟬燭屋の七代目
父の日や改めて読む遺稿集
天平仏まなざしやさし花石榴
走り梅雨屯所に残る刀疵
新選組の顛末を聞く夏座敷

敦賀 倉谷 紫龍

気賀の関跡や伸びゆく松の芯
父の日や真竹みどりを競ひけり
老練の手さばき繭の糸を取る
石榴咲く十三代の手打そば
龍神の松這ふ砂洲や夏怒濤

敦賀 倉谷 ます美

茶を立つる席や単衣の萌黄映ゆ
桑の実の甘ずつばさや楸郵忌
昼顔や安寿潮汲む由良の浜

湧きやまぬ加茂の清水や身を淨む
一駄の旅に出合ひし花サビタ
徳島 福島 吉美

伏流水溢るる忍野花山葵
潮騒を背にする暮し半夏生
菩提樹の実の落つ札所鯉肥る
○沢蟹の爪をたたみて下駄くぐる
空となる米櫃洗ふ梅雨晴間

徳島 村上 和義

梅雨出水土手の脇なる高地蔵
○荒梅雨や大河は海へ泥を吐き
住職が梅酢で洗ふ御賽銭
産院の窓辺の風鈴鳴り止まず
城山を望む茶房のソーダ水

室戸 安岡 みさき

飛石は女の歩幅羊草
目標は生涯現役夏帽子
自らをいごつそといひ生身魂
灯台も宿も岩上土用波
初鯉漁師は単にいをといふ

室戸 仙頭 宗峰

船に乗り被り直せる夏帽子
遊船や首竦めもし橋くぐる
万緑の景境けぢめなかりけり
朝風や御大師様の立つ岬
永久に巖を絞りにて滴れる

具 川 口 崇 子

青垣や崩れては湧く夏の雲
尺蠖の一休みせる立ちしまま
雲低く走る卯の花月夜かな
砂利船の吃水深し梅雨夕焼
○かはせみの色を失ふ速さかな

那 前 田 貴 美 子

蜘蛛降りる祝女の神屋の赤柱
白日傘ときには杖に御嶽道
井戸跡てふ穴の中まで草いきれ
土帝君とていくんの笑へ涼しき樹影かな
さがり花散り敷きながら咲きながら

那 大 湾 宗 弘

白日を天に開きて花ゆうな

ブルースのけだるさ路地の日の盛り
○ポケットの中玉虫のよぢ上る
よつびての街の喧騒早星
さがりばなほたほた海風のかすか

那 比 嘉 半 升

裏山の墓に仕掛くる飯匙情の罨
さみどりに濁る古井や蟬しぐれ
木下闇抜け出て風のグスク径
廃校を洗ひ去りたる夕立かな
風見えて空即是色ひきがへる

宜 吳 屋 菜 々

拝所うがんじょに森のかむさる溽暑かな
月桃つきなしの実ゆれて裏木戸開きにけり
検診帰りの腕に×点雲の峰
基地のフェンス吹抜け茅花流しかな
夾竹桃のあかしろ小粒返還地

宜 幸

すいれんの常世へ亀の泳ぎけり
骨太の扇子に一人師の潤筆
茶柱のゆらゆら繭の花こぼれ

琉歌碑の草の匂ひや星涼し
仏飯ぶく供ふ閏卯月の十三夜

西原 宮城

膝折れば摩文仁の夏の地の焔
オスプレイ蝙蝠の闇揺さぶれり
額もて診る子の熱や夜の雷
耳元をたまゆらの音黒揚羽
滴りの手彫りの洞やクルス壇

豊見城 渡真利真澄

深川東京飯車窓に四葩の群過ぐる
夏蚕守る蚕屋懇ろに掃き清め
○三眠の蚕に扇風機やはらかに
重なつて夏蚕四万頭眠る
四齡の夏蚕白々脈打てり

「お詫びと訂正」

九月号二十四ページ下段、佐藤和子さんの
一句目を次のように訂正します。

稚魚 ↓ 稚魚

勉

俳句

10月号 予告

9月25日発売
予価(本体1,020円+税)

特別作品 長谷川權・辻田克巳・石田郷子

大特集

「俳句」65周年記念

戦後俳壇 100年に向けて

- ◆座談会「俳句のいまとこれから」大串章・宮坂静生・西村和子・対馬康子 司会野口の理
- ▼戦後俳壇トピックス……佐怒賀正美・角谷昌子
- ▼協会が遺した俳句遺産……酒井佐忠

生誕100年記念 角川源義と俳句

- ▼インタビュアー父、源義……角川歴彦
- ▼経緯源義の多面性……筑紫磐井
- ▼「秋燕忌」競詠ほか

別冊付録 「再録・角川源義評論集」

シリーズ
宇多喜代子の「今、会いたい人」第6回
「司馬遼太郎と俳句」(ゲスト) 上村洋行 司馬遼太郎記念館長

電子版同時発売! 電子版は「BOOK☆WALKER」(<http://bookwalker.jp/>)など電子書店で購入できます。
発行 角川文化振興財団 発売 株式会社KADOKAWA 0570-002-301(ナビダイヤル) <http://www.kadokawa.co.jp/>

同人作品の佳句

内海良太

海の日を山の手入れに使ひ切る 若島久清

若島さんは「風の盆」の越中富山八尾の人。農業をしながら近くの山の保全にも力をいれている。

「今日は海の日と聞いていたが、一日中山に入っていたことよ」というもの。こういうのをイローニツシュな捉え方というのだろう。俳句本質論に、井本農一氏の「俳句イローニツシュ説」がある。へくれなるの色をみてゐる寒さかな 綾子 これもイローニツシュな捉え方と思う。

峰よりの風吹き渡る夏座敷 大長文昭

せせこましい都会に住んでいると、このような句を見ると心が開放される。緑の風が通り抜ける夏座敷で、大の字になつて寝ころべば至福というもの。

芭蕉の「奥の細道」の途次で宿泊した黒羽大関藩家老浄法寺図書邸での挨拶句に

〈山も庭に動き入るるや夏座敷〉がある。

菅貫の列に馴染の塗師木地師 藤原千代子

菅貫は茅の輪。毎年六月と十二月の晦日に罪や穢れを祓う行事、宮中行事だったようだが、今は民間にもすっかり定着している。

茅の輪の列に、普段は山住みの塗師や木地師が里に下りて

きて祓いをうける。山人との意外なところでの出会いに話が弾み作者の心が華やぐ。

滴りを汲めりアルミの大柄杓 藤田裕子

銘水の滴り、この水を汲みに遠くから来る人もいる。現場には長柄の柄杓や紐付きのコップが備えてある。皆が使うのですぐ傷んでしまう。

この句の眼目のアルミ製の大きな柄杓が即物的でいい。おそらく凸凹になった柄杓だろう。

深淵の水面に暈くる合歓の花 谷口直樹

水面に写る合歓の花を写生したものだ。合歓の花そのものが美しくおぼろな感じがするので、水に写るぼやけた姿は容易に想像できる。発見というか、本質的なものを把握しているので、読者は共感する。

明日咲くと朝顔の鉢廻したる 田中道江

朝顔市の売り子が鉢を高くかかげて客を呼んでいる。品定めをしている客に、売り子が鉢の裏側の膨らんだ蕾を見せて勧めている。省略された言葉に鑑賞の幅がひろがる。

青潮の満つるや虚子の初句碑へ 吉中愛子

高浜虚子の句碑は芭蕉の句碑より多いかもしれない。その沢山ある句碑のうち、第一句碑が幼少時代に過ごした松山市柳原西の下に建つ。昭和三年に建てられたもので、句は

〈この松の下にたゝずめば露のわれ〉。

経緯を知りたく、「定本虚子全集」を開いてみたが、句碑なとに触れた記事はどこにも見当たらなかった。さすが大虚子だと思つた。

おいしい話
その①
【水】
高橋 順子

「おいしい話」というと、
利ざやがとれそうな話みたいに聞こえるところがちよつと困るが、食べ物や飲み物の他に、目や耳にも心地よい話題を拾っていつてみたい。「おいしい」を広辞苑で引いてみると、「おいしい」に接頭語「お」がついたものがある。「おいしい」を引くと、「いし」（美し）の口語形だそうで、好ましい、見事だ、けなげだ、とかの意味があつて、最後に味がよい、とある。

おいしいものの筆頭は水であろう。見てよし、飲んでよし。山道を歩いていて水飲み場があると、必ず町で買ってきた水のペットボトルを空にして詰め替える。これでコーヒーを沸かして、なんて考えない。ただ喉をうるおし、体の細胞を目覚めさせてやりたい。

いままで、こんなことをしてお腹をこわしたのは一度だけ。じつは山道ではなくて、青森県雫石の神社の杜だったか、流れのそばに杓があつたので、つい飲んでしまった。口や手をすすぐべきものだったらしいが、雫石という美しい名前に惑わされるといふ愚かなことをした。

公益社団法人 俳人協会

LEGEND (佐藤鬼房)

津高里永子

◎俳句と短歌の10作競詠

田島健一 + 島田幸典

◎好評連載

野村直子◎Café Lyricism

筑紫磐井◎俳壇観測

大牧 広◎すぐれた俳句達

坂口昌弘◎毎日が辞世の句

二ノ宮一雄◎一望百里

◎巻頭三句
矢島渚男
棚山波朗
正木ゆう子
川口 襄
石川 一歩
池田琴線女

◎その時、俳句手帳
前田吐実男
◎今月の華
榎本好宏
松岡隆子

座談会
最近の名句集を探る
田丸千種
『ブルーノート』
高浦銘子
『百の蝶』
中村安伸
『虎の夜食』
筑紫磐井(司会)十齋藤慎爾
阪西敦子+横澤放川

俳句四季
Haiku Shiki

2017年10月号

9月20日発売
定価930円(税込)

http://www.tokyoshiki.co.jp/ 東京四季出版

〒189-0013 東村山市栄町2-22-28 ☎042-399-2180

第十五回 万象俳句賞 発表

万象俳句賞 渡良瀬の夏 中村千久



中村千久氏

佳作 茅花流し 卯辰美苗

佳作 アウシュビッツの夏 恒川清爾

佳作 大西日 曾根満

平成二十九年度の第十五回万象俳句賞は審査の結果、右の通り決定しました。

万象俳句会

渡良瀬の夏

中村千久

八木節の鳴つて夏野へ動き出す
夏がすみ山又山のいぶし銀
隧道を抜け万緑に染まりけり
子燕に縦横の空無人駅
銅山に白木の鳥居夏木立
野仏は不動明王新松子
梅雨の蝶息するごとく翅ひらく
錆古りし鉄路を蟻の駆けゆけり

略歴

昭和26年11月26日 東京生れ
平成5年「堅香子」入会
平成16年『洛中惜夏』で堅香子賞
平成17年「万象」入会
平成25年「万象」同人
平成25年より「万象浦和句会」幹事
平成26年より「万象」編集部
俳人協会会員
現住所 志木市館二一―一五―五〇二

あげはてふ風乗りかへて乗りかへて
青梅の散らばる中に去年の種
我勝ちに水の集まる先に滝
岩を噛む逆白波や夏の川
露天湯に節穴ひとつ緑さす
だんべえで軽口飛ばす冷し酒
殺がれたる岩魚眼力失はず
薬味盛る硝子小皿や夏料理
梔子の匂ふことなく錆びにけり
風渡る葦の川原や行々子
葉桜やはせをの句碑に木洩れ月
せせらぎの闇の深さや河鹿笛

受賞の感想

このような大きな賞をいただいたことをありがたく嬉しく思います。

およそ四半世紀を俳句と共に過ごしてきたはずですが、俳句を友とするには長い時間がかかりました。

その間、飛高隆夫先生にいつも背中を押していただき、私をこの世界に引き込んでくれた素基さんや浦和句会の連衆にお力をいただきました。今さらながら感謝する次第です。

「万象」編集部に加えていただいたことが、俳句にのめりこむ契機となりました。それまで雲の上の存在だった方々に身近で接する喜びは、学びの喜びに繋がりました。

今回の作品は、束の間の休息で訪れた渡良瀬溪谷での二日間をまとめたものです。本当に楽しい時間でした。

これを機に精進を重ね、「万象」の発展に微力を尽くしたいと思えます。

茅花流し

卯辰美苗

老鶯や朝日の淡く父の床

両手あげ遺影に見せる夏の海

夏の雲音立てず来る納棺師

ハンカチに包む涙や父の葬

線香の煙濃くなる夏座敷

冷房裡水晶の数珠くもりけり

弔ひの座敷のすみを蟻の道

野辺送り白藤ゆるる山ひとつ

白百合の大きく開く枕花

葬果てて家路へ茅花流しかな

明急ぐ枕飾りの炎ゆれ

葬のあと一袋買ふ青山椒

薰風や棺に小さき庭の花

夜濯の黒色ばかりきのふけふ

火葬場にはらからと酌むビールかな

機関長の文字戒名に夕端居

骨あげや喪主の額のにじむ汗

夫婦茶碗伏せしままなり古簾

花立ての新緑眩し高野槇

花蜜柑ほとけ守りて母ひとり

アウシユビツツの夏

恒川清爾

緑さす穏やかな村一変す

夏空を厳しく区切る鉄条網

死の門へ鉄路伸びたる夏野かな

鉄門に自由てふ文字大西日

万緑へどこどこまでも収容所

百万余運びたる貨車錆灼けて

ヒットラーの白黒写真半夏雨

蜘蛛の囿や丸枠眼鏡山なせる

天井までの杖と義足に夏の虫

下闇や切られし髪を布に編み

走馬燈皆眼ばかりの顔写真

ガス室の天井低し極暑来る

天窓てふガス入れし口夏の雲

ガス室の壁に爪跡油照り

煉瓦古りし銃殺の跡夏日射す

遠雷や人焼きし釜口を開け

天に召されし煙突細し大夕焼

虎が雨百万の死の地を洗ひ

慰霊碑へ無言の日傘並びたる

収容所出づれば青き夏木立

大西日

曾根満

まんさくや溪流村を両断す
 涅槃図の身を伸ばしきる蝸牛
 開帳の千手観音白く痩せ
 永き日の畑に増えたり鹿の跡
 十歩にて春の日照雨の了りたる
 筍焚く蓋の重しは川原石
 老いを鳴く鶯舎人殉死の地
 源流の滴り岩を穿ちたり
 蛇の衣吹かるる隠れ耶蘇の寺
 大西日居残りの子の逆上がり

軍服に風入る袖の終戦日
 村の井のひとり遊びの西瓜かな
 新涼の湖の蒼きを渡船割る
 鷹渡る渦巻く霧を抜けきつて
 落鮎のひとつがふいにさかのぼる
 日のとうに失せし段畑豆叩く
 冬深し勾玉放つ瑠璃の色
 大寒や鎌鋏壁に整ふる
 炭火美し谷の深きを訪ね来て
 紙を漉く歪むわが顔均しては

選評

新しい時代に期待

大坪 景章

第十五回万象俳句賞には広瀬俊雄、岩崎武士、佐藤嘉洋、曾根満氏の経験豊かな人にまじって、新人の名が上がって来て、うれしい状況となった。

これからは、「万象」の新しい時代となっていくことに期待したい。

新しみへの挑戦がいい

内海 良太

事務局から応募者名を知らされ、新旧同人・会員の競詠を頼もしく思った。ことに昨年選者をお願いした札幌の松原智津子さんは、今年は率先して応募側に廻られ、その真摯な態度に頭が下がる思いである。北海道の「万象」連衆、いや「万象」全体にいい影響を及ぼすことは間違いない。

一位、「鳥と一年」岩崎武士さん。新しい句材への挑戦と個性的で類想感の無さを良しとした。

鳥の子の田んぼの土に紛れたり

農小屋の羽目にけら穴二つ三つ

二位、「大西日」曾根満さん。選考過程で一番〇印が多い作品群だった。豊富な材料をこなそうとする意欲が感じられた。

「切れ」が生きればもつと迫力が出るはず。

大西日居残りの子の逆上がり

落鮎のひとつがふいにさかのぼる

三位、「夏のひとこま」成瀬真紀子さん。全体に情感が溢れている。抒情的なものと認識的なもののバランスがいい。

青き縞振れ吹かるる蛇の衣

受賞作品、佳作作品それぞれ妥当な選であったと思う。

構成と一句独立と

小林 愛子

一位に推したのは卯辰美苗氏「茅花流し」。肉親の逝去から葬のあとの日常まで、作者の生活と心理を詠んだもの。一連の作品にはストーリーがあり、一句の独立性も保たれている。〈夏の雲音立てず来る納棺師〉〈両手あげ遺影に見せる夏の海〉など実感があり「葬果てて」「夜灌の」には遺族の心理を表現。「ハンカチに包む」は「拭ふ」だと思う。

二位は中村千久氏「渡良瀬の夏」。夏の渡良瀬を一気に詠んで纏まっているが全体に淡い印象を受ける。淡さの所以は作者の都会的洗練とも、写生の甘さとも云える。〈我勝ちに水の集まる先に漕〉は鋭い。〈せせらぎの闇の深さや河鹿笛〉にも共感。最初の「八木節の」は分かりにくい。「あげはてふ」は、物でなく言葉に触発されているように思う。

三位は広瀬俊雄氏「最果ての地」。〈遠雷や氷河の欠片川に浮く〉〈イグアスの滝に飛びこむ岩つばめ〉。彼の地に臨んだ

																	順位
																	題名
																	作者名
																	選者名
																	大坪景章
55																	内海良太
55																	小林愛子
55																	飛高隆夫
55																	福島せいぎ
55																	原田しずえ
55																	山田春生
55																	江見悦子
55																	谷田部 栄
55																	赤堀洋子
550																	合計

感動のある句を

福島せいぎ

選句にあたって、テーマ性よりも、一句の独立性を尊重した。即物具象に則って、感動のある句をよしとした。

万象俳句賞に輝いた中村千久さん。昨年はご夫人の闘病記を連作にまとめられたが、今年「渡良瀬の夏」を発表。

燕、蝶、蟻、岩魚、行々子、河鹿など身辺の小動物をモチーフに、手なれた手法で表現している。

子燕に縦横の空無人駅

野仏は不動明王新松子

子燕と一体化した表現が無人駅で確かなものになっている。反面、へあげはてふ風乗りかへて乗りかへての自在な句も千久さんの今後を示唆しているように思った。

佳作では、恒川清爾さんの「アウシュビッツの夏」に圧倒された。海外は、どうしても一人よがりになりがちだが、冷静に写生ができていてか、鬼気迫るものがあつた。

死の門へ鉄路伸びたる夏野かな

収容所出づれば背き夏木立

連作の強みと、一歩下がった句に内心ほつとした。

会員の進出に期待

原田しずえ

万象俳句賞は注目されていた中村千久さんに決まった。まことにめでたい。これが新境地のスタートになるわけです。

「渡良瀬の夏」にやや甘さを感じたので、私は三位に推した。しかし「梅雨の蝶息することく翅ひらく」に鋭さがあり、さらに末尾の二句に捨てがたい抒情があった。

一位「鳩の海」藤田裕子さん どの句にも対象に迫ろうとする意欲があった。切れ字を活用することで省略と飛躍が生まれ、句に深みが出てくるのではないだろうか。〈枝拾ひ花盗人の心地せり〉

二位「茅花流し」卯辰美苗さん 父の死を情に溺れず淡淡と詠んだところに、人生の悲哀を感じた。〈薰風や棺に小さき庭の花〉

四位「石狩川」松原智津子さん 旅人の目で見えた作品ではなく、石狩川に依る生活のあり方を身近に詠んだことが非常によかった。〈灯台の丘秋菜莢に砂風〉

今回は、会員の進出が顕著で頼もしさを感じた。今後を大いに期待したい。

もつと写生を

山田春生

中村千久さん、万象俳句賞受賞おめでとう。

受賞作「渡良瀬の夏」は栃木県南東部の渡良瀬川周辺の夏の景を詠んだ作品集で、〈だんべえで軽口飛ばす冷し酒〉など俳諧的な句もあったが、私が採らなかつたのは冒頭の「八木節の鳴つて夏野へ動き出す」はじめ〈隧道を抜け万緑に染まりけり〉など「こうして—こうなつた」と原因—結果を描い

た説明的な句や、梅雨の蝶が「息することく翅ひらく」という平凡な比喩の句が多かつたからである。今後はもつと写生をして欲しい。

私が一位に推したのは南雲秀子さんの「花の雨」である。

これは春から夏の秩父地方の景を描いた作品集で、

大仏は伏目におはす花の雨

天心に句ふがごとき春の月

園児らの笑顔はじけて桃の花

等私の好きな句。写生の目の効いた句が多かつたからである。

佳作に選ばれた卯辰美苗さんの「茅花流し」を私も第二位

に推したが、集中〈火葬場にはらからと酌むビールかな〉

や〈夫婦茶碗伏せしままなり古籬〉等異色作が多くあつた。

俳句の楽しみと方

江見悦子

一位、「渡良瀬の夏」中村千久さん。渡良瀬の夏の日を、自在に軽やかに明るく詠んだ。全編を川風が吹き渡るようで、作者は何よりも俳句を楽しんでいる。

八木節の鳴つて夏野へ動き出す

あげはてふ風乗りかへて乗りかへて

だんべえで軽口飛ばす冷し酒

二位、「アウシュビッツの夏」恒川清爾さん。人類の負の遺産とも言うべき地を訪れた作者の衝撃・感動が伝わる重量級の作品群。徹底的に物に即した叙事的な詠みぶりはいつか抒

情に昇華している。俳句の力を感じた。

走馬燈皆眼ばかりの顔写真

慰霊碑へ無言の日傘並びたる

三位、「古城」竹澤竹里さん。地味ではあるが、山城の春から秋までを丁寧な詠んだ。写生の目が行き届き、表現が平易でやさしく、季語の幹旋が自然。

擲手の源平池に蛸蚪生るる

城ガール土産は総の草風

詩情の深み 谷田部 栄

一位、「石狩挽歌」(岡本敬子) 自分のエリアの素材を切り取る視点が確りと定まっており写生の基本を踏まえて詠みあげている。平明であるが平凡ではない。再読すると確かな詩情の深みを感じさせられる。

二位、「漆胡瓶」(中村弘) 氏は本年度「新人賞」受賞者であり新進気鋭の方である。福田雅子先生の「古典の会」に参加。「漆胡瓶」には古典の造型を踏まえた、自分の目で捉えた表現の確かさがあり一句たりとも揺るぎがない。

三位、「アウシュビッツの夏」(恒川清爾) 異色の外国詠である。戦争体験者としては嘗てのナチス、ヒトラーの独裁政治の暴挙を彷彿とさせられる力作であり、季語の表現に臨場感のある作品となっている。

受賞された「渡良瀬の夏」(中村千久) 題名から鉱毒事件

などを基にしての句作と思われたが意外にも渡良瀬の自然や生活や動物等々、平明におかし味も加えてユニークに詠み込まれている。自然体に詠まれていて無理の無い佳句揃い。受賞おめでとうございます。

応募された方々に敬意を表します。

万象賞の選をして 赤堀 洋子

三十六編の作品に作者と対話するように向かい合い、まず読んで作品としてまとまっているか、素直に景が詠まれているかを見、その後細部について検討して、順位をきめた。

一位の「浮御堂」(林陽子さん)は、春から夏の北海道を詠み、句を通して、地理や歴史に思いを馳せることが出来た。

ムックリの涼しき調べ湖わたる

五月雨るる薄墨色の撫の森

熊の影木道に消ゆ大夏野

二位の「旅の月」(喜多尾明子さん)は宮島、尾道の旅吟。歴史や志賀直哉、林芙美子に対する思いが全体に流れていた。

巖島へ葉月の潮の盛り上がる

千光寺巨岩に聴くや秋の声

三位の「鳩の海」(藤田裕子さん)は琵琶湖周辺の景を、温かな眼差しで丁寧な詠んでいた。

蓬売る摘みたる人の名を付けて

枝拾ひ花盗人の心地せり

そのほか、「青葉風」(鹿毛満子さん)、「大西日」(曾根満さん)、「燕の子」(奥太雅さん)の作品にも注目した。

応募者三十六名の内から、以下に三十二名の方の作品一句を紹介し、ここに敬意を表します。(受賞者四名は除きました)

万象俳句賞応募作品の一句(内海良太主宰選)

旭岳よりまつしぐら雪解川	松原智津子
浜防風風の遊びし風紋に	岡本敬子
くつきりと雪溪の筋羊蹄山	濱谷和代
薄うすと国後島は海霧の果て	林陽子
対岸の山裾かくす遠霞	落合裕子
爽やかやシャツのアイロン念入りに	北浦詩子
観覧車春がゆつくり動きけり	駒形祐右子
野火見んと利根の渡して船を待つ	手島南天
山門に砲弾の痕八重桜	南雲秀子
蚊食鳥飛び交ふ先に黒き富士	奥太雅
解禁の鮑かごより引き剥がす	山下良江
妙見社基壇に残る蛇の衣	竹澤竹里
草の香のさらりと抜くる茅の輪かな	大坪あきら

目をふせて向きをかへたる青蛙	鹿毛満子
朝の雉今日吉日となるらしき	山口秀吉
青しぐれ朱塗反り橋降り残し	藤田裕子
梅雨鴉一羽が鳴くや次も鳴く	島野ひさ
遠雷や氷河の欠片川に浮く	広瀬俊雄
茅花の穂風に吹かれて池の端	新井世紫
夕蟬や水陽炎の橋掛り	桔梗純
野分雲割れ瀬戸内の海青む	喜多尾明子
角切を終へし牡鹿の首太し	中村弘
鬼灯市の完売の札棚の上	福田ふみ子
菜の花や丸くなりたる阿夫利の嶺	佐藤嘉洋
芍薬のうす紙の珠みなざれり	藤原千代子
家康廟膝下に目高生まれたり	小川明美
兎の子の田んぼの土に紛れたり	岩崎武士
臥す犀へ蒲公英の絮飛んでくる	望月敏男
切つ先のやうな葉掴み糸蜻蛉	成瀬真紀子
ほととぎす箱根古道へ坂がかり	福島吉美
夥しお岩稲荷の落椿	丸本祥夫
山のやうに積みたる柘榴一つ買ふ	山下敦子

待望の続編刊行さる

福田雅子著

続 芭蕉の葉

四六判上製本
二二六ページ
二五〇〇円

『続・芭蕉の葉』はどこから読んで面白く、その章、その章で独立した話になっています。これから芭蕉俳諧の奥深い話に触れながら俳句実作に励みたいものです。芭蕉を知ることによって俳句がこれまで以上に面白くなってくるはずですよ。

(内海良太)

お申込みは 有文社まで

「万象」同人・会員は二千円(送料)です。

電話042・475・0436
ファクス042・477・0741

集 生誕二五〇年 正岡子規大特集
特 一長谷川權×三枝昂之対談「子規が選じたもの」ほか

巻頭作品10句

有馬朗人・池田澄子・岩淵喜代子・大野鶴士
鈴木貞雄・星野椿・増成栗人・陽美保子

俳壇

10月号

9月14日発売
定価800円(税込)

巻頭エッセイ
関川夏央

八木健選 滑稽俳壇

新連載 四季巡詠33句 友岡子郷・小林貴子

まんが・天折俳人伝 山崎和賀流 長谷部 徹

ゆうゆう書簡：正木ゆう子×小島ゆかり
日本の樹木12選…………… 広渡敬雄
連載 俳句論のゆくえ…………… 坂口昌弘
子規・仰臥六尺…………… 復本一郎
人生に効く、俳句…………… 小島 健

俳壇時評…………… 榎未知子／俳壇月評…………… 青木亮人

俳句と随想12か月 塩野谷 仁・和田順子

本阿弥書店

〒101-0064 東京都千代田区猿樂町2-1-8 三恵ビル 電話 03(3294)7068 振替00100-5-164430

水郷めぐり

須賀允子

小鮎とぶ朝の琵琶湖の水輪かな
 手漕舟 葭原雀はやす中
 鳩の巢や船頭棹を櫓にかへて
 葭長者訪ねて涼し葭のペン
 安土山青葭原の上にあり
 遠雷や石仏を敷く大手道
 青嵐夢まぼろしの天守址
 夕渚はぐれ鶺鴒一羽低く低く
 本諸子とれぬと嘆く近江人
 一切れの鮎鮓惜しみ一人酒



近江八幡の水郷めぐりは織田信長が宮中の船遊びを真似て楽しんだと言われ、迷路のような水路を葭切、鳩の浮巢、大鯰などとの出会い、船頭さんの話や歌も楽しい。都会の騒音から隔絶され、清浄な空気と水、葭原の水鳥の声に包まれた、至福の一時である。

ここの葭は品質日本一を誇り、屏風・簾・障子等、和の住まいに欠かせないものであり、葭長者の蔵は研究所である。葭の花、穂架の秋、葭刈の冬、紅蓮の炎の葭焼の三月、又訪れたい。

花さびた

久保村淑子

朝まだき湯けむりに涌く岩つばめ
夏霧の動きて山の動き出す
甲虫の頭の転がりぬ森の朝
夏とんぼ侵入禁止の湯畑へ
隠沼の老鶯いよよ昂れる
山百合の斜面を埋め触れ合はず
駒草や急登の先の薬師堂
孀恋の木洩れ日はづむ花さびた
短夜や岐阜提灯の薄明り
風鈴や携帯に亡き母の声



父に次ぎ母の介護で二十年間郷里の前橋に通っていたが、今回の依頼を受けた後暫くして母が亡くなった。当初の前橋近辺を吟行する予定を変更して、長野新幹線で軽井沢まで行き、バスで群馬県北西部に位置する標高一、八〇〇材の万座温泉に出掛けた。江戸末期より湯治場として賑わった所で、天気も良く高原の空気は心地良かった。途中の孀恋村ではさびたの花が風に揺れ輝いていた。どこか落着かない中での吟行ではありました。

着ぶくれて四天王寺の西の門

久しく待ち望んだ良太句集、爽やかな「青嶺」である。四天王寺は推古天皇元年（593）に聖徳太子によって建てられた。守屋と馬子の戦のとき、蘇我氏についた太子が四天王像を彫り、勝つたら寺を建てると誓願したことによる。奈良時代には五大寺に次ぐ地位にあり、平安時代には極楽の東門とされ信仰を集めていた。堂宇は幾度も焼失したが、第二次大戦後飛鳥様式に復原建立された。西の門近くの墓地の塀際に、芭蕉と野坡の墓が並んでいる。掲句の西の門といえは、この二つの墓と思うのが普通であるが、それ丈ではない。「着ぶくれて」とあり何故極楽門といわれた東の門でなく西の門なのか、それは「着ぶくれて」に答が隠されている。西の門を出て小路を少し北へ行くと、有名な大阪の野菜天王寺蕪、水茄子、毛馬胡瓜などの漬物屋「浪花漬にしむら」があり、お正月用に蕪漬など買われたであろう。更に大通りを隔てた西の大阪星光学園の裏は、芭蕉や蕪村など文人ゆかりの浮瀬亭址であり、浮瀬俳跡蕪蕪園として句碑など数多整備されている。主宰は任地の俳蹟はくまなく歩かれていますのであろう。掲句の前後には伊丹の鬼貫と柿衛文庫の句が並んでいて懐かしい。

（須賀允子）

小豆干す東海道に莫塵広げ

掲句は平成六年「風」全国俳句大会が、静岡県焼津市の焼津観光ホテル松風閣で四百三十六人が参加し開催された折の吟行句だったように記憶している。

静岡県は東海道の宿場町が二十二あり、昔ながらの宿場町の雰囲気を残した所が現在も沢山ある。主宰はJR静岡駅から焼津に向かう途中立ち寄った丸子か宇津ノ谷辺りで出会った風景を詠まれたのではないかと思われる。

丸子は浮世絵、東海道五十三次にも登場し、変わらぬ情緒を醸し出すとろろ汁の丁子屋を中心に、旧東海道の面影が今も残る。また宇津ノ谷は丸子宿と岡部宿に挟まれた間の宿であり、集落の中央を旧東海道が貫き屋号を掲げた往時をしのぶ家並みが両側に続く。

丸子も宇津ノ谷も私は何度か吟行したが、庭先や軒先で、朝採りの野菜を売っていたり、竹籠を背に畑へ行く農婦に出会ったり、急斜面の茶畑で茶摘みをしていたり、豆や椎茸を干してあったりと季節毎に句材に事欠かない。主宰もきつとこのような光景に出会ったのであろう。

「東海道に莫塵広げ」という確かな写生と、偶然にも眼目となる良い物に出会えた感動を自然体で詠み、固有名詞も生かされている。当時俳句を始めて二年半の私の記憶の中に確と刻み込まれた一句である。

（神田美穂子）

紺屋町風鈴売りの来てゐたり

掲句は「風」昭和六十一年十月号に発表。

昭和六十一年といえ、一風」の四百五十号記念誌が春に出て、その秋には「風」四十周年記念大会が開かれてゐる。沢木、細見両先生はじめ、滝沢先生、小林同人ら「風」全体が活気に溢れていた頃で、会員数は同人百九十五名、会員は二千五百余と年譜にある。

さて、掲句にある紺屋町、風鈴売りと言葉そのものが懐かしい。自註には「葛飾で。金魚田を一巡りしたあと紺屋町に入る。染浴衣が空にはためき、裏川は染糊で濁っていた」とあり葛飾方面を吟行されたのだろう。

葛飾は東京都心からやや離れた東の郊外。小規模な職業集団の多いところ。染物屋、煎餅屋。朝顔や鬼灯の栽培農家。金魚の養殖、風鈴の製作所も見かける。

句の形は紺屋町以下を「ン」の軽快なリズムをもって、読み下す取合せの句、二句一章が響き合う。

この頃では珍しくなった風鈴の引売りが具象的で何ととっても目を引く。高い音、低い音、澄んだ音。カラフルなガラス風鈴が目につく。

作者の感動は町の名と風鈴売りが一体となって発する懐かしい情趣にある。読者も同じような感動を味わえて初夏の爽やかな風が吹いてくる。

(内海保子)

髭の中口が開きて土用餅

編集部から『阿夫利』全句のコピーが届いた。一句鑑賞の資料としてであった。ありがたく拝読した。心が満たされるような豊かな感性と、無理・無駄のない端正な句姿に感銘を受けた。中で指定はこの句。

一読、とてもユーモラスな景色が浮かんだ。沖縄の私には日本の風習に疎い。「土用餅」を調べると、佐渡や俱利伽羅等、越の地方の色が濃い。この句の前後には、喪服とか金魚田・墓洗ひという文言があるので作者は盆行事で新潟へ里帰りをされたかも知れない。そうであるならこの髭の方は、身内のお年寄りで白い髭をたくわえており餅には蓬も入っている。「これを食べればはらわたになり力がつきますから、折からのこの暑さも乗り越えられましょう、気をつけてゆっくり召しあがれ」となる。部屋には青笹の香がほのか。作者の優しいまなざし。

この句は特に映像的で省略が大胆なので、読者により自由な発想を可能にする余白がある。羅生門の盗賊の様な漢が実は大の甘党で、まっ黒な髭をにやりと開いて土用餅をくらう。と書いてみて、はて、土用餅は甘いものなのだろうか。と、何も知らない私いつものように戸惑ったりもするのだ。

(大湾宗弘)

ニシン街道^{ましけ}増毛

佐藤 哲

ニシン街道「増毛」の回想句が大方を占める。今詠まなければとの思いがあったのであろうか。毎月の万象作品とは趣を異にする。

津軽衆守り札抱き渡り漁夫

屈強の漁師達も人の子。親や妻が託した守り札を肌身離さず持っている。守り札は家族の絆である。無事に漁期明けを迎えなければならぬ。渡り漁夫は東北地方の出身、上五を省いて考えてみては。

網たぐる怒号とび交ふ春の海

大漁の鯨が海水と共に引き揚げられる。船頭の指図と応える声。危険を伴い緊張感が漲る。「春の海」はとかく燕村ののたりのたりの印象が強い。が、この海は紛れも無い北海道の「春の海」なのだ。

ばかりでかきにしん船あり街中に

曾ての繁栄の証の鯨船。モニュメントとして保存されているのだろうか。口語調の表現が力強い。

元陣屋うろこのつきし鯨船

鯨の鱗は魚体に比べて大きい気がする。乾いた鱗が船体に貼り付いている。妙に現実味を帯びてくる。

季語として成立するかどうかの句が見受けられるが、作者は気にしていないのではと思われる程、心を遊ばせた作品。北海道を詠み続けていただきたい。

祭 来 る 伊川玉子

手取川河口の町美川を中心に丁寧に詠まれている。飽く迄も銜のない自然体の詠み振りは、お人柄の為せる業なのでしようか。

夏つばめ手取川の土手の風荒し

町中から川に向かっていている時、川に近づくに従い風が強くなることを経験している。

手取川は白山を水源とする川、石川の通称で呼ばれた時代もあるという。四季を通して豊かな川の表情が楽しめるのでは。燕と土手に立つ作者の晴ればれとした空間が心地良い。川風を全身で「荒し」と捉え、何の束縛もなく大空を飛ぶ夏つばめの逞しい姿がありありと目に浮かぶ。

松原に喇叭のれんしふ祭来る

学ランで喇叭を吹く光景から、伝統の祭ではなく町起しの祭を思う。祭来るは祭が近づくと解釈するが「れんしふ」に終っては心残りである。対象に今一步踏み込んで欲しい。幾つになっても心踊る祭なればこそ、感動の句材を大切に、祭本番の句を見せていただきたい。

松の花入り日ますぐに仁王門

西に沈もうとする太陽があたかもスポット・ライトのように仁王門を照らしている。地味な松の花を配し閑かに暮れてゆく景を淡々と描いた。

同人作品評（八月号）

大木 茂

火山岩を抱く走り根山桜 榎 美幸

日本列島は火山が多く、火山列島とも呼ばれ溶岩原の風景を身近に見ることが出来る。近年では西之島の活動が火山国日本を象徴している。火山岩はマグマが地表や地表付近で急激に冷やされ固まったもので、生成当時は、生物の生息する余地は全くない。溶岩原には風や鳥などによって運ばれた土、糞、植物の種子などが堆積し、植物が芽を吹き始める。そこに虫や小動物がやって来る。溶岩原に咲く山桜は清楚感そのものだろう。火山岩にしっかりと根を張った姿に焦点を当てて力強く詠んでいる。

牡丹剪る礼肥用意して置いて 高橋 ひろ

牡丹は百花の王とも呼ばれ遣唐使によってもたらされたという。牡丹の花を咲かせるには一年中の管理が必要で、施肥や剪定は大切な作業である。作者は、牡丹を剪る時、礼肥を用意しているのである。牡丹は肥料食いの植物であり、花のあとすぐ礼肥をあげ、花疲れした根や茎に栄養を与えなければ

ば翌年大輪が見られない。牡丹との対話が聞こえるような優しい作者の姿が伺える。

しなやかに風を流して藤香る 松原三枝子

藤の花は万葉集や古今集にも詠まれていた馴染の花である。満開の藤棚を揺らす風が甘い香りを四方に撒く。一畝を超すような花穂が風に揺れる様は藤波という言葉が相応しい。「しなやかに風を流して」という表現が藤と風の関わり合いを見事に捉えている。主体の藤を下五に据え、ただ見るのではなく藤の生態を上手く捉え、対象物との距離を感じさせない。

たかんなの出づるけはひや罇あまた 疋田華子

たかんなは筍の古名で「たかむな」「たかうな」と古語辞典にある。筍は晩春から初夏の頃収穫できる。食用にする竹林には堆肥や化学肥料などを施し柔らかな土を作る。晩春から初夏にかけて毎朝竹林を見に行き、太く柔らかい筍の出を待つ。うっかり見逃すと夕方には地上から一尺位伸びており、あく抜きを行わないと食べられない。底の薄い地下足袋で歩くと微かな土の膨らみの下に筍の気配を感じる。作者はそちこちに頭れた筍の罇に気づき生命力に驚いている。

図書室に寝言の声や夏はじめ 仲山秋岳

身に覚えのある句に思わず苦笑してしまった。夏の初めの心地良い図書室の一コマをユーモラスな「寝言の声」を中心に据え、ほかのことは何も語らない。寝言の声に周囲の人は気がついても無関心に聞き流している。しかし、一寸誰だろうと気になり振り返る。そんな光景だろう。ごく卑近にある光景だが、このように俳諧味溢れる句に仕立てるのは難しい。

こひのぼりこひいら十戸同じ姓 神田美穂子

田舎の集落には同じ姓を名乗る家が散在することが良くある。そこでは、お互いに名前で呼び合い、お祭や何か事があると一族が集まり助け合う。以前は、農作業など大きな労力が必要なときは、同族の長の指図に従っていた。その一族に男児が誕生したのである。一族の集落を「こひいら十戸同じ姓」とさりげない表現で纏め、鯉幟に跡継ぎの健やかな成長を託す心情を詠んでいる。

雉子走る縄文土器の出でし畑 谷渡末枝

初夏の繁殖期の雉子の鳴き声は殊にけたたましい。目と鼻の先で突然、不意打ちにあうと寒気さえ覚える。この頃の雉子は若草に見え隠れしながら草の葉、蜘蛛、昆虫などを漁る。獵師によると、メスは複数のオスを従え乱婚だとか。縄文土器の出た畑には、辺りを少し掘ると欠片が結構発見される。

棲み着いた雉子には人間界の営みの痕跡など全く関係ない。無造作に走る雉子と、営々と耕されてきた畑との関わりを上手く捉えている。

地すべりの跡赤土の鉄砲百合 比嘉半升

地滑りは色々な悪条件が重なり突然発生する。集中豪雨や地震などで思いもよらないところで突発する。沖繩の赤土(あかんちゃ)は熱帯や亜熱帯特有のラテライトと呼ばれ、微少な粘土粒子が多量に含まれ、地滑りが発生しやすい。栄養分の少ないむき出しの地滑り跡に沖繩県特有の自生種の鉄砲百合が群生している。鉄砲百合という固い語感の純白さと赤土の対比に風土性を感じる。

糸蜻蛉つるみしままが機織場 渡真利真澄

糸蜻蛉が水辺の水草の上に水平に群れて浮いているのをよく見かける。浮いているのか飛んでいるのかわからない。中には、雌雄が輪を作って交み気持ちよさそうに飛んでいるのを見ることもある。捕まえると、細い体と思えないほど強く繋がっているのに驚く。交む糸蜻蛉が事もなげに伝統ある機織場に迷い込んで来た。機織人はさぞ驚いたことだろう。俳句の目を持って日常を生きていないとこのような風景を見逃してしまう。

俳書探訪

山本とく江

俳誌「秀」夏創刊号（平成二十九年六月）主宰染谷秀雄。

昭和六十一年、斎藤夏風が東京で創刊した「屋根」が平成二十九年三月で終刊。後を託された染谷秀雄が六月に創刊。

先ず白地に「秀」一字の斬新な表紙に惹かれる、新鮮な俳句への力強い歩みを象徴しているように感じた。

「秀」創刊にあたって 主宰 染谷秀雄

「秀」は師系を「夏草」山口青邨、「屋根」斎藤夏風の流れを汲み、有季定型・客観写生を標榜して「待つ心」「共生の心」「名残の心」を作品に投影し、俳壇の一隅に寄与して行きたい。更になるべく早い時期に月刊に移行したいなど抱負を述べている。



夏創刊号

「秀」創刊に寄せて深見

けん二先生は「染谷秀雄

さんが「秀」を創刊する

ことになり、自然な姿で、

輝かしい伝統がつながる

ことになり、嬉しいことです。」と述べ、療養中の「屋根」主宰斎藤夏風さんの「屋根」終刊の挨拶も掲載されている。

結社の顔である題簽を決める主宰が熱望した、書家山本素

竹さんの書を得て成した素晴らしい俳誌「秀」に乾杯。

一俳人として「秀」の創刊を心からお祝い申し上げたい。

参与作品 青葉の頃（十句）より 斎藤夏風

初燕来れば深空のなほ深き

青葉山青葉の里とうち混じり

牡丹（十句）より 深見けん二

薄氷の波の光にまぎれなく

背伸びするものもいくつか犬ふぐり

主宰作品 春から夏へ（十句）より 染谷秀雄

梅花藻のなびく長さや春の川

この葭に向ひの葭に行々子

滝落ちて石打つところ定まらず

不老集（各々十句）十四名より

芽起こしの雨てのひらに師よ癒えよ 蘭草慶子（東京）

吹いて売る鶯笛や梅まつり 岩田由美（福岡）

青き踏むこの一步こそとこしなへ 金谷洋次（東京）

二日暮るる月の雫のやうな星 小坏健水（東京）

生々流転集（Ⅰ）（Ⅱ）それぞれ主宰の選と鑑賞がされており、作品には佳句が多く、主宰の鑑賞は柔軟かつ懇ろである。

また、「三艸文集」の文章は多彩で、読む側を十分楽しませてくれる。新鮮な息吹溢れる創刊号「秀」の月刊移行と益々の

発展を祈念してやまない。

（筆者住所 〒277-0005 柏市柏1・7・1・2006）

夏

燕

高田たみ子 (金沢)



過ぎゆける一両電車青田波
万緑や宮へ真すぐの男坂
夏木立玻璃めぐらせて能舞台
酒林乾ききつたる早梅雨
白山の風を自在に夏燕
草刈るや昆虫館の定休日
草とばし音を飛ばして草刈機
旅人の麦茶たまはる休憩館

海 鼠 壁

大村かし子 (芳賀)



早苗田に影も名残りの海鼠壁
百本の松の古墳に青田風
陶工の遺す窯場や今年竹
青葉風山家丸ごと染まりたる
鬼百合の無縁仏に寄り添ひし
夜の牧仔牛を放す土用入り
久々の鴉の声や土用雨
初蟬や五七五のくづれたる

万象招待席評（七月号〜九月号）

瀨谷和代

春惜しむ

久松和子

芽柳や書道を習ふ異邦人

外国人が手習いを受けている風景を描写した句。一見、報告句となりがちではあるが、「芽柳」の季語の選択により、作者の見守る気持ち、これからの上達を祈る抒情句に仕上がった。「芽」が発育する様子は、人の成長を写生する春の出発にふさわしい季語である。

春の雪地にとどきては泥になり

春の雪は、気温が高いため、地面に着くと一瞬に溶ける。ただ、この句には、続きがある。雪解けとなった水滴が土と一体となり泥となる。この泥を雪からつながつている自然の道理として捉え、さらりと詠んだ。したがって、春泥の季語とは違う。情景の描写として、季語の選択の難しさを感じる一句である。

遠嶺晴

大内マキ子

既出しのこゑよく透り遠嶺晴

一般的には、「声が良く通る」と言うが、作者はあえて「透る」と表現した。牧場には、その声を遮るものがなく、小気味よさを感じさせる。また、「晴」だからこそ、残雪の明るい雰囲気と身重の牛馬への優しさがより増幅される。遠嶺の麓に広がる牧場での一日。大きな景の見える一句。

烏賊釣火闇に一線津軽まで

烏賊釣りは、船団を組み漁に出る。漁場は闇である。闇が意味深長だ。現在、北海道の烏賊漁は、不漁である。沖に連なる集魚灯たる漁火を一直線と描写した。津軽の固有名詞を使い、格助詞「まで」を用いたことにより、起点である函館を想像させ、烏賊漁の眼前の景を示した一句となった。

額の花

大山春江

富士壺のおほふ捨て舟梅雨深し

富士壺は、岩や船底に固着する甲殻類。捨て舟とは、役に立たなくなった舟で漁村は過疎化が進む。梅雨はさらに、舟を朽ちさせる。しかし、富士壺が、捨て舟を住処とし小さな命を育む。眼目は捨て舟、梅雨深しが「廃墟」の世界を強調している。

保線夫の合羽に触る額の花

沢木先生の〈枕木に一寒燈が照らせる場〉が思い浮かんだ。社会性俳句の代表作。掲出の句も保線夫が雨の中で作業している。紫陽花には、花の色を包んだ雨粒が額に集まっている

のか。沢木先生の句とは対照的に、「額の花」で明るさのある句になっている。

谷保天神 赤松郁代

天神へ辿るはけ道囀れり

「はけ道」を知らないといふ句は鑑賞できない。「崖線」とわかれば、天神の場所も推測でき、句の中に高低差を感じる事ができる。さらに、「辿る」を充てたことで、「はけ道」の状態も表現した。そのため、「囀れり」の季語が作者の背中を押している声援にも道案内としての声にも聞こえてくる。風土性の強い地理的用語の使い方が勉強となる一句である。

芝に佇ち芝に座りて暖かし

動作をリフレインにしたことで、季語の「暖かし」を五感で感じている。感覚的な句ではあるが、芝の緑など春の野の色彩が見えてくる句でもある。俳句は、目で見るだけではなく、五感を研ぎ澄ますことで句に深みを与えることができる。

菅 浦 佐野和子

満開の白つつじかな隠れ里

中七に切れ字「かな」で強い感嘆を示し、「つつじが満開であること」に感動はしているものの、眼目は「隠れ里」に違いない。例外的に切れ字を中七にしたことで、「隠れ里」をより強調することができた。この隠れ里にも花は満開になると

いう思いが伝わる。

舟人の万葉歌碑や鳥雲に

菅浦は、幽閉地であり、交通手段は、舟だけ。舟に乗る人には、帰りの切符はない。一方通行であるがゆえ、季語の「鳥雲に」が悲哀を誘う。鳥は、北へ帰ることができない。雲も儚い。季語が持つ言葉の広さ深さを感じさせられた。

峰 雲 古川京子

早苗田を伏流水の漣す

漣だけでは動きを想像させられないことからサ変複合動詞として、伏流水の状態をより明確にした。早苗の成長を促す伏流水。早苗にとつて水は命。白く波立つがゆえ、小さな早苗の緑を際立たせ、輝かせている。沢木先生の句に、へ早苗饗の膳の下より小猫かながある。早苗を詠む時期に違いはあるが、どちらも即物具象の句である。

黄鶺の声は濡らさず日照雨

日照雨は、「晴れ」と「雨」の相反する二つの具象を捉えた言葉であり、心の移ろいをも写生句として描写できる。この句の場合は、黄鶺が季語のため、日照雨は、気象にすぎない。「濡らさず」とあるので黄鶺は晴れた山林で朗らかに囀っている。実景の中で、季語の選択、眼目を表現する難しさを感じさせられた一句であった。

石原ノオト

テーマ



「引越し」

引越しは人生の縮図

福岡 石原好宏

生後三歳半まで私は大阪市内に住んでいたが、太平洋戦争の激化に伴い、両親の故郷鹿児島に移った。鹿児島市内で一度転居した先が鹿児島大空襲の際に焼夷弾の直撃を受けて全焼。そこで母親の実家があった上伊集院村(當時)に、焼け出された日の夕方から一家四人、徒歩で引越した。

昭和二十二年四月には、私の転校で再び鹿児島市内に戻り、学部卒業までを過ごした。最後の一年半は母方の大叔母が勤める幼稚園で過ごし、大学院進学のため福岡市に転居した。

転勤のため山口県宇部市に移り、十

四年間で二度の転居後、平成元年からは福岡市に戻った。一年間公団住宅に住んだ後、戸建ての今の家に二十七年間住んでいる。七十八年近い人生で、私の引越しは十五回を数える。

ジャンボカップとペティナイフ

東京 平子甲奈

初めての引越しは、岡山から東京の大学の寮に入った時のこと。母に付き添われ足を踏み入れたその部屋は四人居屋だった。三年生、二年生、新入生が二人。荷物はあつという間に片付き、母と私は生活に必要なものを買っていくことにした。その時先輩たちが見せてくれたものは、井ほどの大きさのカップに持ち手がついた洋食器だった。

「これがジャンボカップ、一つあると便利なよ」と満面の笑顔だった。

母と私は商店街で一緒にジャンボカップとペティナイフを選んだ。買物を終えると母は帰って行った。「もう家族とは離れて暮らすんだなあ」と一人で寮に戻った。そこには楽しい三人のルームメイトたちが待っていてくれた。

あの日のジャンボカップとペティナイフを私は今も大切に使い続けている。

四年に一回

明石 前島 幸

引越しは我が家では即転勤のこと。実家の親も転勤族のため、生涯の引越しは十六回、その内六十歳までは十五回で、四年に一回という事になる。

転勤は突然やって来る。或る日主人が帰ってその旨を告げると、そこから引越し戦争が始まる。一足先に主人が赴任、残された私は、不満な子供達をなだめ、三週間位で新しい土地に行く。新生活なじめる子なじめない子様様で、私の方は地元の教室、講座に出てみて、土地柄にふれることにする。

今は業者任せの引越しだが、得た要領は、食器は縦に入れる、本は八分目にして後はタオル等で軽くする事。

最後の十六回目は、定年引越して、以来明石で二十五年、それを待って始めたのが「和服リフォーム教室」で、今では沢山の知人に囲まれている。

北海道 弁

江別 大田佳美

大学まで自宅から通っていた長女が、一人暮らしを始めたのは東京。アメリカで大学院の卒業式を終え、成田から直行した娘と羽田からの私が合流して新居へ向かいました。

四日後の入社式までに生活用品を揃えるべく、大型リサイクル店に行き、ベッドから家電まで、実にたくさんの商品を購入しました。

支払いの時、レジの青年が「お客様は北海道から来られたのですか？」と声をかけて来ました。??「僕、札幌にいたので分るんです」と、さわやかに言われて、ハツとしました。

品定め中の会話が彼の耳に入り、「北海道人」と気づかれてしまったようです。北海道弁を使っているという意識は全くなく、堂々としていたのですが。

感謝

金沢 谷内瑞江

昭和四十五年「万博」の年、私は大

阪で勤務する夫と結婚した。間もなく長女を出産し、それを機に二人の郷里である金沢へ帰ることにした。

職が決まるまで、しばらく私の実家に世話になったが、社団法人の老人ホームY園に夫婦で勤務する事になり、寮の一部屋を提供して貰い、家族三人の暮しが始まった。当時は台所やトイレが共同使用で、不便な思いをした。

そんな時、二人目の子を授かり、一部屋の寮を出て、近くのアパートに引っ越した。その後、上の子が一年生の夏には、夫の実家の近所に家を新築し、一家で新居に移ることができた。

近年、区画整理が始まったが、今は息子達と廊下で繋いだ二世帯住宅に同居して、感謝の日々を過ごしている。

北斎には負ける!? 引越

東京 福田ふみ子

高校を卒業して五十年招待学年の同窓会案内が来た時はとても驚いた。五十年ぶりに恩師や同級生に会った。再会した同級生のS君が、山形から

出て仙台での学生生活を始めてから今まで二十回引越をした、と淡々と手紙に書いてきたことがあったから、私は何回引越をしたろうか?と数えてみた。

十八歳で家を離れて半自立学生生活を始めた。当時の情報源は友達や先輩。誰彼が出るから広くて安い所があるよ、そんな長閑さがあった。都留市の下から上へリヤカーでの引越。東京に出ようと国分寺市のアパートへ引越し、大学のある都留へ通う様にした。閉塞的な街に嫌気がさしたからだだった。引越には、その時その時に理由があるのだ。

結婚後も何度か引越を繰り返し、私も十五回くらい引越はしていた。

「万象ノオト」投稿募集

▽2月号「初恋」(10月末日締切)

▽3月号「別れ」(11月末日締切)

▽長さ 本文 17字×19行以内

▽投稿先

〒168-0071 東京都杉並区高井戸西

2-18-1-107 久留島規子

魂の俳人 村越化石

静岡

小川 明 美

村越化石（本名村越英彦）は、大正十一年静岡県志太郡朝比奈村（現藤枝市）に生まれる。昭和十三年、十六歳の時、志太中学（現藤枝東高校）の身体検査でハンセン病罹患がわかる。治療のための離郷を拒む息子に母が、「ならば一緒に死にましよう」と諭し、上京を決意させた。

生ひ立ちは誰も健やか龍の玉（平12）

「子どもの頃の思い出は、いくつになっても覚えていいる。ふるさとの小道やそこに咲く花、朝比奈川で魚を捕り、ジバチの巣を探して熱中したものだよ」朝比奈川は、今も化石生家のすぐ横を穏やかに流れている。私が訪ねた六月も、水が澄み、青葉がやさしく揺らぎ、子どもたちが水辺で遊んでいた。

治療に励む化石は、療友から俳句を勧められ、新聞などに投稿。「化石」という俳号は、この頃付けたもので、「化石」という名は、故郷に帰ることもできない、世に出て暮らすこともできない、生きながらにして土の中に埋もれ、すでに石と化した物体のような自分を化石になぞった」と言っている。

昭和十八年、ホトトギスの本田一杉の指導を受け「鴨野」に入会。昭和三十四年、大野林火の「冬雁」に感銘を受け「濱」に入会し、一杉が亡くなった後、林火に教えを乞いた

いと手紙を出した。当時、ハンセン病は、誤った知識で感染力が強いとされていたので、化石は、その手紙を消毒して送った。その消毒まみれの手紙を受け取った林火は、快く引き受け、

年に数回、楽泉園（群馬県草津

町）を訪れ、指導することとなった。林火には「みなさんは、不幸な病気で肉体を病んでいるが、心までは病気ではない。心の俳句を作りなさい」と言われ、親交は深まっていた。

松虫草今生や師と吹かれゆく（昭44）

化石が生きることに前向きでいられたのは俳句があったからだろう。また、それは林火のおかげと言っても過言ではない。戦後、特効薬プロミンが投薬されたが、後遺症を抱える。光を失った眼、自由のきかない身体にもかかわらず、生命力強さを詠み続けた。その句作から、いつしか「魂の俳人」と呼ばれるようになり、人々に勇気を与えた。

昭和三十七年、第一句集『獨眼』から平成十九年『八十路』まで八つの句集を刊行。その間、蛇笏賞、山本健吉賞を受け、紫綬褒章を受章する。平成十四年、生家に近い藤枝市岡部「玉露の里」に化石句碑が建立され、六十年ぶりに帰郷する。

望郷の目覚む八十八夜かな（平7）

平成二十六年三月八日没、九十一歳

参考 広報ふじえた特集「村越化石」



枯野抄—芭蕉から蕪村へ

福田 雅子

大とこの蕪ひりおはすかれの哉 (蕪村句集)

「大とこ」は大徳で、高德の僧をいう。従って「蕪ひりおはす」と敬語表現をしている。「蕪村秀句」(永田龍太郎著)に、評釈があるので、少々長いが援用しよう。

「荒涼たる枯れ野原、枯芒や尾花は輝いているけれど、鳥も飛ばず、獣の影もない。その枯草に隠れるようにして、とっかり腰を据えて脱糞している僧の姿が見える。側には従者もあり、僧衣も立派であるところから、おそらく高德の坊さんらしい」との解。このような詳解はなくても、誰しも一読、この句から意外性、滑稽味を感じとることは容易である。

芭蕉の「病中吟」として、次に挙げる句は人口に膾炙した名吟である。芭蕉の漂泊の人生における最期の句である。芭蕉は常々「平生則辞世也」と言っていたので、敢えて「辞世」と定義する必要はなく、師の「病中吟」と称し、この句をもつて、俳諧に徹した生涯の終わりの句とする。

さて「枯野」とは、草の枯れた野原をいう。しかし芭蕉が元禄七(二六九四)年十月八日に(旅に病で夢は枯野をかけ廻る)と詠んで以来、俳諧、ひいては広く文学の世界において「侘び」「軽み」の美的理念を生み出したといっても過言ではない。以来「枯野」は単なる冬の季語の域を脱して行く。

中世の歌語で謂う「制の詞」となってしまうとも言える。「制の詞」は「聖なる詞」と言い換えてもよい。芭蕉の死に結びついた標の中の季語となった気がする。

蕪村は芭蕉を憧憬しつつ、尊崇しつつも、敢えて「枯野」を一般的な景情に戻したかったのではないかと私は思う。

蕪村の詠んだ枯野の句を列挙してみよう。

馬の尾にいばらのかゝる 枯野哉 (安永四)

てらくと石に日の照枯野かな 題苑集

蕭條として石に日の入枯野かな 句集

石に詩を題して過る 枯野哉 遺稿

山をこす人にわかれて枯野かな 題苑集

何れも芭蕉の妄執のかけめぐる枯野とは質を異にしている。昼と夜の変化のある枯野、漢詩より切り通った枯野の景等々。注目したいのは、拙文の筆頭に挙げた「大とこの蕪ひりおはすかれの哉」である。再び永田龍太郎の評価を次に。

「人間の自然現象に、超俗の高德と醜を美化する枯野の清浄さとの取り合せが見事に描かれている」との頌詞を肯定したい。繰り返しになるが、この句、高德の僧の所業だから面白いのだ。ただの男なら面白くも何ともなく、行儀の悪さだけがピツクアップされて、句にならない。芭蕉の枯野と蕪村の枯野、その相異が拙文で理解して頂けたら幸せである。

四十年前の話。独逸で暮らしていた頃。東ドイツのハイウエーではトイレが極めて少なかった。旅の途中、小用のため、林に駆け込んだら、なんとなんと。

恒川清爾（鎌倉）

巻頭作家（九月号）プロフィール



恒川清爾さんは昭和十一年愛知県海部郡富田町春田のお生れで、地名のとおり豊かな水田地帯に育ちました。

東京大学工学部を卒業され日立製作所に入社。退職まで物づくりに関わり、引退の後、科学技術の歴史に興味があり大学院入学。現在も研究会を続けられています。

清爾さんと俳句の関わりは、会社の先輩、藤江昭氏の「品濃句会」で俳句の基礎を学び「風」に入会。初の入選句は平成十一年十月

新調の甚平を着て母の背に
基本に忠実に素直に詠まれています。

近年の作品

母の忌や母の縫ひたる白地着る
「母の縫ひたる白地」と、物に即した写生で、母上への深い愛や感謝の思いが、情を抑えて詠われています。

藤江氏がつくば市に移られ、逝去の後、「風」からの同人、朋子夫人に選を仰ぎました。現在は「横浜句会」「洪福寺句会」で、小林愛子副主宰のもと、徹底的な写生と「切れ」を学び、昨年の「万象」俳句賞の応募作品「秋のモロッコ紀行」は、「感動の所在と、切り取り方が読者によく伝わる」と、内海良太主宰が選評されています。

万象作品の佳句

流灯の大きな闇に吸はれ行く

「……」の句からは、たった一つの流灯と、それを祈る思いで見つめる作者の姿だけが見える。：濃厚な宗教的雰囲気漂わせる。飛高隆夫先生の丁寧な選評は、大きな喜びであり、俳句実作に勤しむ力となりました。

梅雨入や駆け込み寺に蛇の目傘

大佛のやさしき猫背冬夕焼
お住まいの鎌倉を親しく詠い、
林檎剥き妻とまじめな話する
ランドセル背負うて見せる新入生
ほのぼのとした確かな目で、御家族を詠います。

一昨年、神奈川で開かれた「万象」全国俳句大会では、懇親会の司会を。

又、句会の幹事や句会の会場とりを長年勤め、沈着な行動力で、神奈川支部を積極的に支えています。

そして、九月号で巻頭となりました。
窓拭けば借景の山滴れり
万緑や五体投地の袈裟赤し
婦省子に父は無言で門に立つ

麦熟れてモヒカン刈りの穂の尖り
ゴルフ・水泳・写真・技術の歴史等豊かに人生を楽しまれる清爾さん。健康に留意され、一層の前進と、日立フアミリー「品濃句会」の指導に力を尽くされる事を願っています。

（浅井敦子）

万象作品

飛高隆夫選



花木天蓼なだるる崖に水奔る 佐野 芝宮留美子

結界の空を漂ふ梅雨の蝶

針三本長針はどれ時計草

夕されば睡蓮の白極まりぬ

残雪の羅白岳へと雲の影 酒々井 中嶋久登

目の前の国後遠き夏の雲

夏草や屯田兵の上陸地

知床の岬の茅花流しかな

かなぶんのふんと障子に当たりけり 静岡 岩崎武士

犬と猫見てゐるだけの大百足虫

羽二重の嬰兒と母の茅の輪かな

子の唄に応ふる如く螢舞ふ 佐倉 横川良子

下町にプレスの音や額の花

江戸弁の道案内や夏の雲

大甕に蓴菜育つ百花園

万緑や風吹き抜くる能舞台 栃木 上岡佳子

網代笠渡され舟の客となる

風に乗る佐原囃子やあやめ舟

蟬鳴くや矢立初の碑の上に

沙羅の花白きを引きて落ちにけり 静岡 石川裕子

いつも来る猫今日は来ず梅雨の月

百合の香や遺影の笑みに笑み返し

夕まぐれ今朝も寄り来し黒揚羽

札帳

勝木享子

蟬時雨しるべ傾ぎし宇津の闇

敦賀

齋田勝子

幾たびも堰のり越えて鮎遡上

山法師空に白雲湧く如く

北浦詩子

霊山の水をたたふる大植田

湖の青空より深き日の盛り

傷鴉泥水を浴ぶ溽暑かな

五右衛門風呂沸かす畑中夏鷺

齋田に植女の跣揃ひけり

白樺をもてあそぶかな青嵐

佐々木茂

途切れつつ風の摩文仁へ蟻の列

那覇

中本清

オオゴマダラ光の斑もて跳り出づ

川面切るオールに光る夏至の日よ

黒揚羽闇のほひと地の湿り

千島桜咲きて大雪山山開き

夏至南風砲火に焦げし壕の口

東京

長谷川信也

滝行の念仏いつか揺れ初むる

踏み出して蟬の初音や試歩の森

園田鶴子

波音の岩屋にあまた蚊喰鳥

せせらぎや涼しき風の山法師

噴水の向うに見ゆる幼き日

広き葉の端へと歩むかたつむり

竹重富子

山峽に集落一つ夕焼けて

青鷺の低きくひぜに窺へり

天辺へあと一息の立葵

船橋

宮本加津代

朝風のすがすがしさに白木槿

夏の朝石のベンチの光りけり

子燕の巢立の今朝の空青し

札帳

高山誓英

初蟬の朝の声の一つきり

うす衣をまとひて所作の美しきかな

くもの罫の翅に朝日の輝けり

札帳

高山誓英

新月の闇澄みゐるたり草螢

青鷺の差し入る一步しのびやか

雲間に浮かぶ利尻岳や昆布干す

更衣姿見前の昼擦れ

横山康博

けんか神輿気負ひて酒を酌みかはす

アカシアの花房ゆるる風の道

太田佳美

蝦夷晴れや青蔦昇る楡大樹

青葉闇蝦夷栗鼠駆くる植物園

宵祭鬼太鼓とどく電話口

昭和良し青き簾と青疊

日々変る夕焼の色見て飽かず

明易の庭や鳥の羽光り

老鶯の人待つ間を鳴きくれし

瘤二つつけたるやうな袋角

雨上り蜥蜴腹這ふ仏足石

晴れ晴れと夏鶯やいろは坂

夕涼み祖母は赤子をあやしつつ

一筋の庫裡の灯洩るる青葉木菟

おしやぶりを脚へ昼寝の保育園

夕暮の風を放さぬ合歡の花

尼寺の雨の匂ひや蓮の花

咲き初むる日光きすげ靄淡し

登山電車手にとどきさう濃紫陽花

梅雨空を突き抜けさうに楠大樹

麦笛の翁に集ふ子等の声

飛石に白のうすれる沙羅の花

良平の歌碑苔むして木下闇

雉鳴くや良平生家の広き庭

新島 中塚滋子

燕 渡辺志ま

宇都宮 福田 弘

芳賀 福武幸子

益子 光岡れい子

真岡 上野恭子

鹿沼 渡辺利子

良平の歌碑を清める青葉雨

ダ・ヴィンチの素描の少女風薫る

どれどれと覗くバケツや目高の子

夏つばめ覗きて暗き城址の井

起伏ある芝のそちこち文字摺草

そぞろ行く奈良町小路月涼し

飛鳥路の畦に青鶯身じろがず

紫陽花や医者に借りたる忘れ傘

城跡のせせらぎ蝶のたゆたへり

園丁の十葉残す木蔭かな

白鶯のまだ飛べぬ子を傍らに

夕風や河骨花を閉ぢるあたり

青籬影の揺れある仏間かな

夏木立大鷹巢立つ羽音かな

香の強き八嶋の茅の輪潜りけり

梅雨の蝶葉裏に翅をたたみけり

夏柳 水路 貫く海野宿

夏木立鎮もる中の無言館

沢蟹の這ふ山城の裏参道

通り雨沼の浮葉のひるがへり

夕仕度窓越しに入る植田風

泰山木の花白くつきりと宮の杜

栃木 飯塚キミ

佐野 飯塚満里子

木村君子

黒川しげ子

齋藤ミチ子

島田和枝

関口かつ子

そら豆むく茨の白わた青き香す
城址や親と鳴き合ふ鳥の子
風現るる一叢白き螢袋

佐野

高田貴子

薫風や笙の音流る婚の列
湘南や千のヨットの白じろと

店網洋子

鬼やんま隨身門に日の斑かな
夏夕べ鮎が走る電話線

寺内まち

病床より見ゆ旋回の夕燕
一輪の梶子卓に夕餉かな

仲山さよ子

風涼し日の斑の溢る北出丸
竹林に不意に現はる川蜻蛉

松田富夫

潦斜に掠め燕の子
月山の池塘に蝌蚪の生れにけり

茂木弘子

溪深き裏見の滝の壺溢る
手に握る岩魚の鼓動激しかり

照枝

御手洗川の涼しき音を辿りたる
蟬涼し木立の奥に無言館

土浦

澤

夕さりの菝切騒ぐ舟着場
雨のあと芝生はひ出す蚯蚓かな

土浦

照枝

とめどなく蟻塚水を飲み込めり
滝行のふとし恥ぢらふ一青年

新座

多田英治

台風一過世界はみんな生れたて
哀れやな揃ひ砂浴ぶ羽抜鳥

川越

岡野輝子

達磨絵の渋の匂ひの大団扇
ブロッコリー切口濡れて届きたり

川越

津金房子

骨董市前ゆく肩に揚羽蝶
山間の茅葺の駅夏つばめ

川越

常見イツ子

老鶯や番所の杉戸固く閉づ
梅雨晴や御所騎馬隊に女性騎士

川越

常見イツ子

路地抜けてくちなし匂ふ蔵の町
覗き見るルーペの先に徹の花

川越

山下とし子

大空の入道雲やパンダめく
山百合の花の重みに傾けり

川越

山下とし子

風の味含み仕上がる夜干梅
にはか雨案山子に借りる麦藁帽

川越

山本敦子

水色の幟はためく夏祓
打水や庭に生るる夕の風

川越

山本敦子

散り急ぎ落ちて真白や夏椿
仏桑華ミンサー織は海の色

坂戸

守山勝江

脈打つごと雪溪雫したたれり
山雨来て暮そろそると歩み出す

坂戸

南雲秀子

香山山につかの間の虹大きかり
緑蔭のベンチに婆とのら猫と

所沢

大利根や夕顔の花ほの白し

千葉

大月玲子

その奥に丹沢山系田水引く

前山の低きに雲や走り梅雨

老鶯のしきりなる声若々し

報はれぬ平和の礎沖繩忌

起き抜けの飲み水ぬるし半夏生

七夕や四十年訪ふ夫の墓

薄闇の玻璃戸を泳ぐ守宮かな

日当りに出でせはしなき蜥蜴かな

青田波風にのりたる白き鶯

鮑かけ俎板更に梅雨一日

炎天に蒸発するや昼の月

山鳩の姿の近く声遠く

茅葺きの茅のほつれや夏椿

菩提樹の青実膨らむ木下闇

忽と咲く四百年の蘇鉄かな

道端はどくだみの花ばかりなり

さらさらと雲かるやかや夏の月

絵馬の文字太くはつきり五月晴れ

露を剥く厨見えある山の宿

梅雨しきり水輪かさなる船溜り

握りしむ暗き報せや竹落葉

葉桜の闇の中なる数寄屋橋

船橋

片桐帆一

十葉の五弁の花を見付けたり

消防士木蔭に待機川祭

とんばうの三步の先に影落す

色知らず苗朝顔に水やれり

ペロペロと舌出し我を見る蜥蜴

予報士の迷ふ天気や花あぢさゐ

重ならず咲いてくれたり額紫陽花

舞鶴湾竹藪やはら帰還せり

梶子や渡哲也も老いにけり

単線に乗つて今年も枇杷の里

梅檀と雨に誘はれ古城跡

野仏に祭仕度やコップ酒

磯蟹をさぶりと波のさらひけり

イヤリングゆれて娘の祭笛

見響かす風車一基や潮干狩

閉ぢられしままのカフェなり蔦茂る

おほむねは梢は越えず蟹かな

先生も水かけ合ひてプールの日

無人駅日傘くるくる客一人

花莫塵の少しささくれはじめたる

単線の駅舎を抜くる若葉風

槐島 修

中川泰夫

山口秀吉

鹿毛満子

石川幸子

野田成夫

渡部洋子

目の前に雀小走る梅雨晴間
みんみんの初声届く朝の卓
青くさきトマトの赤を籠に盛る

市川

奥澤よし江

縮む背に誇りにじませ夕端居

日輪をひらりとかはす黒揚羽

どしやぶりの束の間晴れてゆやけかな

東京

石井登女

ほんのりと琥珀いろなる梅酢かな

しんしんと紫陽花の色深まりぬ

雲眩し眼前の白沙羅の花

合掌のガンジー像へ夏日濃し

空爆の跡を覆へる新樹かな

風やみて鋏形拾ふ軒の端

枝剪るや指につき来る天道虫

干からびしみみず一匹敷石に

万緑の風の匂ひや枯山水

濁り池泡の弾ける海暑かな

制服の少女茅の輪をくぐりけり

ひとときの子三代梅仕事

水道の蛇口細めて桃洗ふ

ビル街の風にさらはれ夏帽子

煎餅に葵の紋や古茶入るる

島中の蛙鳴きだす佐渡の夜

小池宗彦

桑原優美子

草間三香子

岡村純子

石山風童

まくなぎの追ひかけて来るはげの徑
夏草に放られてある石の白

東京

下嶽孝一

自転車の女医の往診炎天下

悪戯鬼も天使の顔の三尺寝

遠くより瀑布とどろく登り坂

夏草の中も縄張り猫の声

草いきれ残る匂ひの夕間暮れ

夕立一過土の香匂ふ草千里

夏帽子保冷剤入れこれでよし

金魚すくひすくはぬうちに破れたり

神の田の早乙女赤き蹴出しかな

戸袋の巢立のひよの声高し

町内のラジオ体操黄のカンナ

滝壺のしぶきの奥の地藏尊

谷川岳の水ふんだんに冷奴

化粧塩厚し尾の立つ鮎料理

羅や帯締の音きちきちと

夏遍路たどたどしげの読経かな

夕立あと雀来てゐる水たまり

向日葵の一群に聞く風の音

涼しさは小川の流れ独り占め

神官の袴水色梅雨晴間

中嶋かつえ

中澤桃子

徳竹良子

田崎京子

鈴木光正

杉浦一子

ひと雨の重きに零れ柿の花 東京 中村 弘

蝶の飛ぶ高さありけり花菖蒲

道真の実梅転がる社かな 中山岳夫

城跡のいたるところに七変化

残る鴨不忍の空あてどなく 長谷川はるみ

朝顔市子規漱石も出掛けたり

ジャングルのやうな路地抜け夏の空 東 順子

置き去りの自転車青き蔦纏ふ

落ちさうな梅の実一つ二つ三つ 平子甲奈

新嘗の摘穂のあとの株を刈る

青き藁刻む反り刃の鈍き音 藤田信子

落葉溜る豚舎の屋根に猫眠る

吉良公の眼前梅雨の雨激し 松野寿美代

青嵐四つに組みし力士像

ベトナムの沖に漁火夏の月 松本幸男

藤椅子のカバーを白に友を待つ

夏帯をポンと叩きて見返りぬ 松野寿美代

扇風機無人の室で黙黙と

進学塾木陰に灯り村の夏 松本幸男

螢狩り帰りの裾に光りをり

町裏にお七の墓や木下闇 松本幸男

手にとれば父の破れ声夏帽子

桑の実を摘みて信濃は嫁の里 東京 宮川昭子

枇杷売りの媪のなまり志賀の島

餌を待つ無人駅舎の燕の子

車椅子の媪の笑みや菖蒲園 宮脇秋峯

子等の手に麦藁編みの螢籠

蚊遣火を腰に作務僧池さらへ

巡礼のしやがみて見詰む半夏生 山森明子

空指してキリキリ上るねざり花

二杯目もむせてしまひぬ心太

梅雨曇り空と大川つながつて 武蔵野 砂地宏子

目を閉ぢて万緑の中風の音

居眠りの少女うなじ汗ひかる

客迎ふ冷さうめんの祖母の里 日野 喜多尾明子

芋の葉のなべて垂れたる大旱

洗ひ髪少女となりし手のしぐさ

静けさや蛇江りゆく池の屋 八王子 栗原紀美

膝痛む雨の前ふれ梅雨の蝶

雲海の虹は横長富士山頂

螢狩り鼻緒ゆるめてくれし君 町田 井上篤子

黒百合の漆黒さやか山の雨

猫みつむごきぶり消えし戸の隙間

叢を出できし蛇と眼を合はす

日差し入るプールの底の幾何模様

雨あとの鉄路の湯気や炎天下

子蠅螂心もとなきうすみどり

万緑へ翁声張る詩吟かな

雨あとの森あをあと合歡の花

梅雨の月メタセコイアにとどまりぬ

連れ立ちて夜店を覗く娘たち

ガスボンベ置きて夜店の焼き鳥屋

実桜の舗道に黒き染みのこす

寝苦しく目覚めて赤き夏の月

ぴよんと跳ね葉と同じ色子蠅螂

太陽やハイビスカスの赤と黄と

炎天の大地を削る重機の刃

蔭も無き荒野をよぎる夏の蝶

廃線の路床の鏽や草茂る

畦道に水音かすか螢待つ

金網の錆びてほつれて沖繩忌

凌霄花の色の褪せたる暑さかな

応援歌乗せて五月の風渡る

神宮の階長し樟若葉

パレードの果てて薫風残りけり

町田 桔梗 純

阿部トキ

大久保義和

岡 元枝

岡田幸吉

富田 要

長野高朋

風鈴の風強き日はくくられて

梅雨寒や昼を灯して針仕事

青芒雨降りたれば尖りたり

卯波切りシヤチ悠然と船の脇

白樺の林に帯成し水芭蕉

能登の海青し浜辺に合歡咲きて

朝茶事の露地に待つ間の蟬の声

墓洗ふ今日は一人と語りかけ

子蠅螂草風に揺れすがりたり

砂洗ひ辣韭の山ひかりたり

門前の地藏そろひの甚平かな

睡蓮と蓮のひしめく寺の池

五月雨や盧花の書院の薄明り

竹林の風のざわめき梅雨きざす

ひんやりと花くちなしの息づかひ

絶筆の読めぬ乱れや釣忍

ひとしきり螢袋は風のまま

白靴のまぶしき病癒えし人

子供らに囲まれてゐる毛蟲かな

紫陽花の静かに寺の混み合へり

両の掌に灯す螢の謎めけり

麦秋や取り残されし地藏堂

横浜 正木喜美代

松崎芽ぐみ

三木豊子

豊 美佐子

大久保 進

高野翠子

横山ユキ子

鎌倉 恒川清爾

青空や雲より白き泰山木の花

父の歳迎へ一人の夕端居

知床の海に轟く瀑布かな

立葵花を重ねて空青き

谷戸の闇人声頼る螢狩

青洲の母の献身曼陀羅花

八重葎雀啣へて猫帰る

南風や紫深きジャガランダ

友と酌む岩魚の骨酒峽の宿

水口の棚田に群るる花菖蒲

黒土に花粒散らす額の花

朴咲いて遅き入日の奥日光

花嫁の白無垢まぶし五月晴れ

乱鷺の電線にゐる孤独かな

扇手に空気切り裂く踊りかな

輪をくぐり飾りの茅の輪ただけり

父の日やいつしか父の生きし歳

身ごもれる人の大きな夏帽子

城壁を洗ひ流して五月雨

雨雲に低く飛び交ふ夏燕

茄子の花数へてをれば寺の鐘

避難タワー一気に越えて黒揚羽

藤沢

湯浅政男

茅ヶ崎

久保田富士子

秦野

秋山憲三

松田

古谷悠紀子

小田原

河野貞夫

甲府

江口嘉郎

静岡

興津千鶴子

新緑や登呂田の波の光増す

習字塾ゴーヤの日除け風やさし

神主の混り茅の輪を結び上げる

浜川の土留め若鮎群れるたり

居眠りや鞆の上の夏帽子

象舎より雄たけび聞こゆ今日大暑

犀の角ぶつかり合うて梅雨の明

早苗東投ぐる飛沫のきらめけり

田植笠足抜くときによるめけり

大空へなんぢやもんぢやの花高し

見ゆるもの全て明るき小暑かな

薰風や羽衣松へ鳶の笛

滝壺に音を残して沢となる

瑠璃蜥蜴郵便受けを出でにけり

真夜中の村響かせて春の雷

桐の花香りを放ち雨後の空

青嵐審判長の赤ネクタイ

曇天や川鶉が杭を踏み外す

頭から掬へと手本金魚売

形代でさする脳天膝がしら

手をつなぎ幼茅の輪をくぐりけり

茄子漬の紺を刻みて朝始まる

静岡

繁田たけ子

杉山 明

新川澄子

本多ひとみ

望月知恵子

望月敏男

横山かよ子

ばくばくと守宮の鼓動玻璃戸越し

燒津 小梁洋子

雪解富士虫の如くにヘリコプター

松永光代

雨雲のたちまちふくれ蝨の声

玉泉湖遠くかすかに時鳥

梅雨晴間櫂一氣に盛り上がる

百年の柱と梁や雲の峰

夏山の雲がひとつを追ひ抜きぬ

江の島の海岸走る夏の霧

踏まぬやう浜屋顔を覗きたり

鎌倉てふ四葩藍色昨夜の雨

でで虫の這ひし痕あり水匂ふ

短夜や枕花の香漂ひて

夕やけて灰色の街異国めき

七世の庵主の逝きて濃紫陽花

梅雨けふる浮かび上りし送電塔

子を抱ける地蔵へ添ひて濃あぢさゐ

ひと口の新茶が永久の別れとは

花蓮のいま開きゆく比丘尼寺

介助受け昼の湯浴みや柿若葉

ぬきん出し仏舍利塔や夏鶯

蘭塔へ楓若葉の影の濃し

秘仏見し京に味はふ體料理

枇杷啞へ寺の屋根越え鳥かな

青空に帽子投げにし夏野行く

梅雨寒の部屋に香るやレモンテイ

飛び立ちて天道虫の後ろ羽

父の日や男の子生れしと電話あり

飴色の母の遺稿や娑羅の花

かはたれどき棗の花のうすみどり

玉眼のするどき仁王日の盛り

もはや誰も戦後と言はぬ夾竹桃

逆縁の知らせ紫陽花うなだるる

球児ひとり離して論す雲の峰

片陰や帽子であふぐ身のほめき

ほととぎす芭蕉堂への道すがら

倍野喜代子

ただ一つ水母ただよふ汽水かな

天覧の杉炎天をおほひたり

螢高く星の明かりに重なれり

松井佐枝子

大滝のしぶきに曝す五体かな

金沢

隠れ湯へ一筋の道合歡の花

水上依乃

氷室雪先づ青笹でお薬師へ

宮崎惠美

玉泉湖遠くかすかに時鳥

保田ひろ

巢燕へ逆さ傘吊る老舗宿

中石紀美代

百年の柱と梁や雲の峰

内池宏行

江の島の海岸走る夏の霧

中川雅月

鎌倉てふ四葩藍色昨夜の雨

倍野喜代子

短夜や枕花の香漂ひて

松井佐枝子

七世の庵主の逝きて濃紫陽花

西田たかこ

子を抱ける地蔵へ添ひて濃あぢさゐ

卯辰みち子

花蓮のいま開きゆく比丘尼寺

道場啓子

ぬきん出し仏舍利塔や夏鶯

松井佐枝子

秘仏見し京に味はふ體料理

西田たかこ

青空に帽子投げにし夏野行く

松井佐枝子

飛び立ちて天道虫の後ろ羽

松井佐枝子

飴色の母の遺稿や娑羅の花

松井佐枝子

玉眼のするどき仁王日の盛り

松井佐枝子

逆縁の知らせ紫陽花うなだるる

松井佐枝子

片陰や帽子であふぐ身のほめき

松井佐枝子

天覧の杉炎天をおほひたり

松井佐枝子

螢高く星の明かりに重なれり

松井佐枝子

辣蕪を漬くる匂ひのこもりけり

風はらむ彌宜の浄衣や夏祓

歌 賀

前川千代枝

青田風橋なき川を渡りくる

風鈴や南部の鉄の触るる音

白壁に高き卯建や麻暖簾

木洩れ日に糸取る糸の煌めけり

擦れ違ひざまに掛香香を残す

紫陽花の家族の如く咲き満てり

吉田紫火

梅雨晴間みどりこの如四肢伸ばす

一陣の風の馳走や夏座敷

緑燃ゆ土佐の幕末烈士像

御 坊

清水勝子

四万十の螢舞ひ込む屋形船

土佐湾や山は犬枇杷鈴なりに

迷ひ犬の貼り紙濡らし梅雨に入る

大 阪

入山繁幸

母の部屋唱歌聞こゆる夜の秋

梅雨明けや摩文仁に祈る女学生

大空の色を選びぬ更衣

徳 島

木村義郎

青き風青き波打つ青田道

時の日や記念の時計まだ動く

愛用の八雲のキセル梅雨じめり

頭を下げて潜ぐる堀舟梅雨出水

浜野桃華

嫁ヶ島鷺のコロニー梅雨夕焼

雲海に聳ゆる富士や空の旅

徳 島

山本晴美

五稜郭堀の虎杖大きかり

裕次郎遣せしヨット色褪せず

羽を閉ぢ葉陰にひそむ梅雨の蝶

山本瑤子

いつからか使はぬままの蚊帳を干す

吊忍買ふか止めよか道の駅

石 井

木内珠美

野良猫の会議あるらし夏の星

夏の夜を走る猫の目鈴の音

ビー玉は弟のものラムネ飲む

蜘蛛の子のとまらぬ速さ夏座敷

木内マヤ

ひとなきに皮蝨けり藁

洗剤の香に蜂の子の寄り来る

風波の音なき音の夕青田

高月 巖

自転車で落日を追ふ大青田

とんばうの羽根に動けり夕日ざし

戸袋を蹴つて椋鳥巢立ちけり

小 松 島

岡田あゆみ

新緑やうどんの匂ふ納経所

弘法の台座を抱く蜥蜴の子

十葉の花は星屑夜の庭

田上幸子

蚊の命容赦なく打つ母ごころ

今年竹天辺の皮吹かれをり

鬼百合の茎真直に捧げくる

福 岡

宮田千恵子

引揚船降りて博多の草いきれ
 汲み置きにさざ波たてり男梅雨
 支那街に石の角卓夏燕
 紫陽花や海抜零の終着駅
 次々と飛魚の頬掠めたり
 七夕竹九条守るの文字揺るる
 梅雨寒や読経に混じる浪の音
 近づけばせはしくなりぬ蟹のあし
 薔薇の昼肘掛椅子の老牧師
 背ヲ撫づるだけの看取りや夕立過ぐ
 水遊び見守る距離に濡れてをり
 床の間に飾る三線長包忌
 水牛の寝そべる村や花カンナ
 夏蝶や骨甕置きし資料館
 ラワン蔭ゴロボックルかも子等の笑み
 ちはやふる神社の祭り落語会
 見守られ巢立鴉の喧しく
 朝の雨重く崩るる牡丹かな
 水切りて宙を一転夏つばめ
 空蟬や静けさ極む今朝の森
 手のひらに乗る爪程の青蛙
 楚々と咲くなすびの花の二つ三つ

長崎 丸本祥夫

西海 山下敦子

那覇 謝花寛管

砂川道子

札幌 島崎 洋

多田陽子

中鉢弘一

八代洋子

柏の根夏の大地を鷲掴み
 火の神てふエルムの木陰風薫る
 老鶯の声の響きし杣の宿
 連峰の晴れて広がる青田かな
 子をあやす都議選候補梅雨晴間
 西瓜苗植木の鉢で楽しめり
 じゅんさい池緋鯉寄りくる雨模様
 葉ざくらやじゅんさい池の静もれり
 短夜のみづほ句集に追悼句
 形代や打ち添ひ越ゆる速き瀬瀨
 吹き上げて厨あらはや夏暖簾
 隣人の逝きし窓辺に青簾
 無住寺を囲む大樹や青嵐
 明早しけむりのごとく夢消ゆる
 濃紫陽花いよいよ深し雨兆す
 川風のほどよく抜くる青簾
 じゅんさいの下をゆつたり群るる鯉
 静寂を醸すせせらぎ螢川
 濃紫陽花医院の門に昼灯り
 放映の浜は故郷や昼顔咲く
 慰霊堂に忘れしままの梅雨の傘
 子燕や親の気配に声あげて

札幌 吉田克己

東根 門脇好子

新潟 大湊とせ

大湊とせ

川村みよき

倉田松仙子

斎藤ヨシ

榎原キヨ子

佐藤幸示

佐藤シズエ

島津治子

郭公やゆつたり流るる信濃川 新潟 高野松風

梅雨晴や蘭学通りに屋敷門 佐野 売野 緑

青柿の虫を枝ごと切りにけり 花村ヨシ子

蘭鑄の瘤より浮きて餌をつつく 藍工房合歓の花風吹き抜くる 大川政子

短夜や午前二時テニス試合見て 安久津 登

葉桜の影参道に骨董市 涼風や津和野の鯉のまつたりと 夕闇に浮ぶアナベルてふ紫陽花 雨上り育つ牛蒡の花の棘 味噌汁に蕩けてしまふ初茄子 青葉の坂曲がりまがりて毘沙門天 雲海の透きて大地と瀬戸の海 湯上がりの母の髪すく夕端居 星空の瀬水に添ふや群れ螢 老鶯や急勾配の木舗道 梅雨晴やメタセコイアのまぶしくて 雲切れて浅沙の花の開きけり つくば 阿部より子 草いきれ湖へと続くけもの道 さいたま 須藤初枝 露草のむらさきと白まじりたる 明け方の郭公ひびくひさしぶり 郵便夫纏はる蝶と来たりけり 草加 鈴木清江 薄浅黄より始まりぬ七変化 発車せし窓に青田のうねりかな 和光 板垣陽子

校門に色とりどりの梅雨の傘 宇都宮 稲川清子

紫陽花へ次々触れる登校児 方賀 大畑ハマ子

茄子をもぐ掌にちくちくと棘ささる 河上洋子

鉢植の垂れて揺れる小判草 北井茂子

万緑の山を眺めて傘寿会 小林元子

ウオーキング途中夏越の輪をくぐる 見目トキ子

合歓の花相合傘の夫婦かな 河上洋子

草をひく雨雲切れてつくば立つ 老鶯や急勾配の木舗道

小紫陽花そば猪口にさす陶の里 北井茂子

睡蓮や群なす魚の波かすか 梅雨晴やメタセコイアのまぶしくて

紫陽花に守らる陶の七福神 見目トキ子

大夕焼水面の波に砕けたる 雲切れて浅沙の花の開きけり

酒店や目高遊ばす一升瓶 小林元子

露草のむらさきと白まじりたる 雲切れて浅沙の花の開きけり

青田中新幹線の通る村 小田 碓貝綾子

子燕の誕生記す道の駅 碓貝綾子

紫蘇ジュース口元染めて飲みにけり 碓貝綾子

車窓より桜木蓮野の花も 佐野 碓貝綾子

老幹に初うひしきかな花ざくろ 川越 榎本美代子

母の忌や白夾竹桃の満開に

濃紫陽花丹の玉垣に寄り添うて 栗田文代

今何時聞きたくなりし時計草

かる親子はすに 一列川渡る 黒木敬子

友の窓烏瓜の花登りゆく

老鶯や媪一人の畑仕事 鈴木アキエ

紫陽花を疲れ果てさす日差しかな

夏が来るサツカー少年土臭し 滝沢潤子

花終るグラジオラスに手をふれて

新盆に迎へし猫は八歳に 千葉 岡野恵美子

青嵐旅立つ綿毛軽やかに

嬬やかに葉をねむらする合歡の花 清水美知子

トラウマはギリシャ語と知る夏の海

打水を放つ先より乾き初む 松浦陵保

朝涼のうちに済ませし大仕事

夏座敷こち良き風猫眠る 柳澤道子

影落とし猫を惑はず黒揚羽

梅雨明や初値を競ふ銚子港 佐倉 有泉正夫

広々と旧家の間口夏燕

朝早く芝刈りの音鳴りひびく 杉田富美代

雨降つて紫陽花さらによき色に

銀輪の少女背にする夏帽子 佐倉 竹内 実

手の平の居心地わろし守宮跳ぶ

黒雲の湧き立つ彼方雷光る 立原千代子

梅の実の産毛水泡銀色に

湧き水で新茶を沸かす津軽人 四街道 後藤誠二

弘前城若葉の下を人力車

赤門や銀杏青葉を風通る 船橋 入河 大

七夕に離れ離れの異動かな

新緑の中の小さき赤鳥居 近藤澄子

空豆を供へて父と話したり

地球儀の北極圏に小蟻かな 松戸 石川 幸子

枕辺の昨夜の読みさし明易し

風鈴の垂れしままなり鷗外荘 菊岡緋路

向日葵や愚直といへど一本気

湘南のマストの数や浜薄暑 東京 赤松わ子

花十葉ゆるゆる登る女坂

亡き父の土の匂ひの夏帽子 雨宮ミチヨ

葉の先で共にゆれをる蝸牛

曇り日の噴水音をきはだてり 新井世紫

散策や紫陽花丸く葉つば色

新盆や満月照らす白提灯 安藤美酒々

たくましましき夏草引くや父母の墓

風吹いて姿を消せりあめんぼう

東京

梅本不二男

煮上りし夏大根に箸せはし

夏草や茅葺屋根の休み処

北口富栄

大寺へ小流れの道えごの花

夕暮の鶺鴒へ滝音落ちにけり

田中明子

夏の鳩ひと声あげて潜りけり

籐椅子の読書三昧暮るるまで

鶴田智美

朝の香や金柑の花こぼれ居り

風薫る光雲作の観世音

中ノあさ子

削られしお七の石碑五月闇

あぢさゐの花に誘はれ明月院

西村サカエ

暮れなづむ空とこまでも夕焼けて

鬼灯の完売の札棚の上

福田ふみ子

神宮で瑠璃小灰蝶と出遇ひけり

大花火幼児の瞳に小花火

府中

竹村晃子

悲鳴あぐ蛇の抜け殻枝先に

主なき屋敷を包む草いきれ

国立

阿部幸子

街路には誰もをらざる油照り

トンネルを抜けて静かな夏の雨

南場雅子

絵の如し白鷺三羽田の畦に

株立ちの竹の撓りの涼しさよ

日野

渡辺八枝子

音立てて目高はじける森の池

梅雨茸触るる指先煙立つ

青梅

志村みち

遠青嶺雲の白鳥湧き出でぬ

夏帽に覗く真つ赤な耳飾り

中村政子

休み畑今は一面あやめ咲く

足元は月の明りや螢狩

横浜

大駒泰子

子燕の一羽残れる八百屋かな

御田植の天皇の背に老いを見る

奥野周光

泰山木香り語りし友いづこ

啼き合うて声の悪さや梅雨鶉

加藤和子

濡れ猫を丹念に拭く梅雨の午後

朝の日をよぎる蜥蜴の早さかな

後藤晴子

のぼりきて蜘蛛つまみあげらるる

入道雲庄内平野の田の続く

坂本具子

裏庭の小さき祠や花石榴

畑打つや蜥蜴ま二つ大暴れ

佐藤正美

夏蝶のペアでひねもすいも畑

春二番急降下せる大鴉

柴田雅春

仲春や線路をわたる雀たち

庭先の山百合へ寄す車椅子

鈴木律子

青鬼灯地面近くに三つ付く

夏来る平和の礎黒光り

若林昌子

梅雨夕晴うす紅色と母云ひし

アイーダ聴く恋とは切なし夏薔薇
緑蔭に人待ち顔のベンチかな
今年竹葉師如來の深庇

川崎

青木明代

老鶯や木立を縫うて聞こえ来し
五月晴空を響かせ鐘をつく

鎌介

佐藤千晴

菖蒲田の花大きかり水枯れて
立て掛けしサーフボードや風の朝

伊勢原

長嶋和子

さくらんぼ父に小さき武勇伝
柔らかき水に影生む花菖蒲

山本カツ子

牛蛙水面に声の波紋かな
若葉風ごつごつ青き辛夷の実

秦野

佐藤嘉洋

大地震に崩れし垣や額の花
せせらぎに岩魚の遊ぶ白川郷

松本

藤森利子

夏休み孫に手取られ鍾乳洞
時の日の競りにと時計磨きけり

静岡

高橋一夫

錦蛇の真つ白な骨梅雨寒し
米粒のごとく散り次ぐ花南天

富田キヨ

隣家より伸びし朝顔今朝二つ
雨足に煙るビル街梅雨鴉

西村まさ

子供らの露店のはしご祭笠
露天湯に居並ぶ女日焼け顔

望月えい子

子らの吹くホルン響けり山開

燕の子猛獸館の軒下に
白鷺の巢に雛鳥の動く羽根

静岡

望月 南

ベダル踏むハイビスカスの風の中
合歓咲くや錆びた自転車積み重ね
枝蛙谷保天神の杜に鳴く

吉野美智子

青蘆のさやぎに川面暮れにけり
見送りの帰りに近道牛蛙

伊東

阪根征矢子

山開き鈴つけ鳴らし金剛杖
若楓揺らし荷物の届けらる

川根本

鈴木裕一

白鷺の川面見つむる夕間暮れ
ふるさとのユーカーの花まつさかり

可見

井原ミチ

車椅子夏帽子の子座りをり
黄昏の野に声残り揚雲雀

金沢

河野尚子

アルパカの前歯の白し青葉光
野鳥園の網を掠むる夏つばめ

清水文子

はたはた神百万石の宵囃す
熱中症予防の水を持ち歩く

高木艶子

夏萩のぼつぼつ咲くや浄土句碑
戦没の礎へ百合の真白かな

田上ナツ子

緑さす合掌造りの校舎かな
唐崎の松に螢ら明滅す

西田秀子

天覧の大杉の宮はたたがみ

暁鳥敏の歌碑なりユツカ咲く	<small>金沢</small>	廣田宏美
夏萩の咲き初む参道千代尼塚		
ふるさとの真青なる空青胡桃		谷内瑞江
廃校に足場を組めり栗の花		
山うつぎ見つつ故里風うまし	<small>白山</small>	鶴尾正江
鵜飼舟仕舞ひて闇の長良川		
あどけなき妙見菩薩や沙羅の花	<small>敦賀</small>	伊上はるゑ
井伊谷に武具赤々と風薫る		大田ふじ枝
比翼塚裏に消えさる夕螢		
瑠璃蜥蜴つまづき走る石畳		川口和代
大瀑布碧玉の空奪ひけり		
銜して湖水を走る瑠璃の声		茂山暉子
雨しとど紫陽花寺に傘の華		
菩提寺の庭に清らの沙羅咲けり		吉川禮子
峠茶屋香りの高き笹粽		
傷の脚夏越の被ひ受けられず		前島 幸
観覧車の空をかすめて夏燕	<small>明石</small>	
湧水に生れし螢軒端まで		林 早苗
緑蔭に地藏の赤き帽深き	<small>徳島</small>	
幾千のバラ園の隅葱坊主		宮西修一
籐椅子の想ひ出を断つ収集車		
蚊柱の渦の巻きたり解きたり		

父の日の花束傾げ始まりぬ 福岡 相本和子
 そそくさと湯浴みしたるや走り梅雨
 梅の実のほのかに香る机上かな 石原好宏
 新緑の中の窯跡能古島 園田清子
 赤土は古窯の名残り梅雨の蝶
 定期船滴る山へ近づけり 鶴田輝代
 卯月あかり浅黄斑の翔つ気配
 浜万年青古き灯台仁王立ち 古山みどり
 螢火や無重力なる闇の中
 山笠や法被ふどしの女の子
 潮の香を口いつばいに燕の子 那珂川 高山ひさ子
 夏萩や島に小さき孔子廟

新入会員の紹介(平成29年8月現在)

高田 みや子(千葉県) 永 廣 久 智(千葉県)
 渡 辺 正 剛(神奈川県) 小 池 清 晴(東京都)

『珈琲タイム』の解答

- 【問1】 1 イ 2 イ 3 エ 4 ア 5 イ 6 ア
 【問2】 1 むくろじ 2 うらがれ 3 とうもろこし
 4 またたび 5 あけび 6 むかご
 【問3】 1 出づる 2 白し 3 浮びたる 4 なほ

万象作品の佳句

飛高隆夫

境界の空を漂ふ梅雨の蝶 芝宮留美子

「結界」は辞書を見ると、「仏道の修行や修法のために一定区域を限り、その障害となるものを入ることを許さない場所」ということになる。要するに仏の領域である。その空間をあてどなく行き来する梅雨の蝶。作者はそれを「漂ふ」と感受した。その頼りないさまが、作者の心の深いところに触れたのである。作者は佐野の人。

夏草や屯田兵の上陸地 中嶋久登

「屯田兵」は明治八年、北海道の警備と開拓のために設置された、平時は農業に従事し、戦時には軍隊として活動する。当初に派遣されたのは東北地方の土族であるが、慣れない土地での生活は苦難の連続であっただろう。その上陸地（筆者は詳らかにしない）は今夏草の茂る原となっている。（夏草や兵どもがゆめの跡）。作者は思わず呟いていたであろう。作者は酒々井の人。

かなぶんのぶんと障子に当たりけり 岩崎武士

「かなぶん」は黄金虫・金亀子。植物の根や葉を食べる害虫であるというが、俳句を作る身にとっては夏の夜の楽しい景物の一つである。（俳人にかなぶんぶんがぶんとくる）金子兜太はその楽しさを詠んだものであるが、掲句は金亀子が障子に当たる瞬間を即座に捉えて、まさに即物具象の句。作者は静岡の人。

下町にプレスの音や額の花 横川良子

下町の風情の一つは路地にある。細かく入り組んで、両側には鉢や木箱を利用した植栽が並ぶ。作者はおそらくそのような路地を辿っているとき、プレスの音を聞き止めたのである。プレスの具体的な内容がはっきりしないが、金型を使う音か印刷機の回る音であろう。下町には昔からそのような小工場が多いのであるが、作者は周囲のいわゆる下町情緒との間に違和感を感じたのである。それにしても、「額の花」とはいかにも下町である。作者は佐倉の人。

沙羅の花白きを引きて落ちにけり 上岡佳子

沙羅の木は高さ十餘りになる高木である。従って、その花も地に散り敷いているのを見て、改めて見上げて確かめることが多い。見上げた視野に沙羅の花が落ちてくる。作者はそれが地に着くまで見届ける。そしてふとその花が、一筋の白い光を（あるいは色を）引きながら落ちてきたと、思い返したのである。作者は栃木の人。

夕まぐれ今朝も寄り来し黒揚羽 石川裕子

黒揚羽は、いつも忽然と現れる。高いところから、あるいは茂りの背後から。そして、しばらく目の前を舞い、また俄かに舞い去ってしまう。作者は夕暮れの庭に立ち、目の前に現れた黒揚羽が今朝の庭を舞っていたものと同じだと、懐かしさを感じたのである。作者の庭に生れ、そこに住み着いているのかも知れない。作者は静岡の人。

齋田に植女の蹴揃ひけり 齋田勝子

日本は瑞穂の国であるので、稲作をめぐる神事・芸能は数え切れない。田植えや収穫などの行事を模擬的に演じるのである。この句はその神事に参加する植女（早乙女）たちが勢ぞろいした様子を詠んだものであるが、田植笠や赤いたすきや蹴だしなどではなく、「蹴」に焦点を当てたことによって、清々しさが強調されている。作者は敦賀の人。

黒揚羽闇のほひと地の湿り 中本清

真つ直ぐに、黒揚羽の本性に迫った句である。揚羽蝶は大型で、その動きには、夏の強い陽射しを跳ね返す躍動感がある。そして、（魔女めくは島に生まれし黒揚羽 大竹朝子）の句があるように、神秘感がある。作者は感覚を通して（視覚・嗅覚・触覚）、見事にその神秘感の生まれるゆえんを把えている。作者は那覇の人。

噴水の向うに見ゆる幼き日 長谷川信也

噴水を見ていると、噴水に関わる幼き日の思い出が蘇ってきた、というただそれだけのこと。多くの人が似たような経験をしているだろう。この句では「見ゆる」の一語が働いて、こういう事があったというのではなく、まざまざと在りし日の自分のすがたを思い描いているのだ、ということが分かる。その時、作者は過去を再び生きているのだ。作者は東京の人。

初蟬の朝の声の一つきり 宮本加津代

春は初蝶、夏は初蟬。俳句を作る者にとっては、どちらも嬉しく待ちがてにするものである。初時雨。初つくものは何でも嬉しく慕わしい。さて、初蟬というものは、いかにもこのようなものである。このようなものであるから嬉しいのである。自然体で自然に対して。作者は船橋の人。

新月の闇澄みゐたり草螢 高山哲英

この句の「新月」は、秋の季語としてのそれ（陰曆八月三日の月）ではなく、陰曆で月の初めに見える月をいっている。それは正に、あるかないかの仄かな光ではあるが、作者はそれを意識したことによって、あたりの闇をより一層深く澄んだものとして感受したのである。その闇の底、草の上に明滅する螢。仏僧である作者はどのような思いを抱いたのであるうか。作者は札幌の人。

七月の同人句会は、三十日に行われました。しばらく蒸し暑い日が続いたこともあって、体調を崩された方も推察され、また開催日が定常の第四日曜日より一週間の遅れとなったことも影響して、出席者は三十一名となりました。

残りたる射的屋一軒羽蟻の灯 田中道江
海の家や温泉地の歓楽街には、射的屋がいまだに残っている。その灯に羽蟻が群がっている、ひなびた場末の情景を詠んだ。下五は「羽蟻の夜」が適切か。

陶片に茶碗の丸み草の花 谷田部 栄
古窯の周辺には陶片がいっぱい落ちていますが、手にした陶片に丸みを感じたという。陶片と草の花との二句一章の句であるが、陶片の丸みと陶片の落ちている辺りの草の花との取り合せが良い。

スターリンの生家を訪ひぬアロハシャツ 須賀 允子
アロハシャツの句は珍しいが、スターリンの生家を訪ねたらアロハシャツの見物客がいた。米国のアロハとロシアのスターリンの米ロ対決というユニークで面白い取り合せであるが、取り合せもこの辺が限界かも。

高台に復興住宅立葵 柳澤 宗正
福島など災害地を思うと気持が暗くなるが、いよいよその復興住宅が高台に完成したという明るく素直な句。再起のスタートの象徴として、季語の立葵が効いている。

(以上内海主宰選)

短夜や中也詩集に葉さす 沢辺たけし
夏の夜は短く、読書に夢中になって時間を忘れてしまい、思わず我に返って、読み止しの箇所を葉をさしたという。中也詩集では少し甘すぎるか意見の分かれるところ。

迎火の風の変りて終りけり 小林 珠江
お盆行事の迎え火である。途中で風向きが変わり、危ないと感じたので終りにしたのである。しかし、風が変わったことを、お迎えする霊の気配と受け止めたので終りにしたとも、なかなか奥深い句である。

七月の野麦峠は雨の中 島野 ひさ
この時期の季語に「水無月」や「風待月」がある。これらが情感豊かなのに比して、「七月」とストリートに言うところと厳しく強い印象となる。中七に「野麦峠」とある故にびつたりである。野麦峠と言えば、女工哀史の舞台であり、製糸女工の彼女たちにその日差しは厳しく雨は強かったであろう。その特有の感覚を「七月の野麦峠」で見事に捉えた。

(以上小林副主宰選)

漁火の同間隔の涼しさよ 古川 京子
漁火が等間隔で点々としている様子を涼しいとみている。涼しさもこういう感覚による見方があると感心した。

塩で揉む胡瓜日向の匂ひして 久留島 規子
胡瓜揉みの匂いに日向を感じたという。日常の家事の何でもないところを句材にしているが、これは感性が良くないといけない。

(以上原田顧問選)
(山本右近)

第十回「万象」神奈川県支部吟行会案内

神奈川県支部の吟行会を横浜で行います。

県外の皆様にもご参加いただき、広く交流を図りたいと思います。異国情緒あふれる港町を散策してみませんか。

期 日 十一月十三日(月)

吟行地 元町・中華街・山下公園・大棧橋・赤レンガ倉

庫・馬車道・みなとみらい地区・その他(自由吟行)

句会場 かながわ労働プラザ(Lプラザ)四階会議室

句 会 J R 根岸線石川町駅中華街口(北口) 徒歩三分
十三時〜十七時

投句三句 締切十二時三十分

会 費 千円(当日)

選 者 内海主宰、小林副主宰、江見編集長ほか

申込み 神奈川県以外の方は、はがきに参加者の氏名
を書き十一月八日(月)までに左記へ。

大橋 雅子 〒236・0017

横浜市金沢区西柴4の5の15
☎045・782・7792

珈琲タイム

⑨

【問1】欣一・綾子の秋の句です。空所を埋めましょう。

1. でで虫が [] で吹かるる秋の風 綾子

ア 墓 イ 桑 ウ 軒 エ 蛙

2. 鶴亀の [] の金竹の春 欣一

ア 水盤 イ 水引 ウ 庭石 エ 掛軸

3. [] その名やさしく夜更けたり 綾子

ア 星月夜 イ 秋時雨 ウ 天の川 エ 十三夜

4. 新しい [] の匂ふ無月かな 欣一

ア 畳 イ 枕 ウ 香炉 エ 茶壺

5. [] を三尺離れもの思ふ 綾子

ア 朝顔 イ 鶏頭 ウ 撫子 エ 早稲の香

6. 天の川 [] のごとく見て眠る 欣一

ア 柱 イ 砂子 ウ 少女 エ わらべ

【問2】秋の植物の季語です。読み方を答えましょう。

1. 無患子 2. 末枯 3. 玉蜀黍

4. 木天蓼 5. 通草 6. 零余子

【問3】歴史的仮名遣い、文語文法を校正しましょう。

1. 仔猫らにあたたかき飯月出ずる 中山純子

2. 花木榿芯まで白き加賀女 沢木欣一

3. 白桃の水をはじきて浮べたる 望月皓二

4. 鶏頭の火中にありてなを燃えず 田島和生

(解答は81ページにあります)

「万象」中央句会七月例会

平成29年7月2日
東京文化会館33名

内海良太主宰選

珍しき蛾の掌に止まりたる
梅雨蝶の我にまつはる幽霊坂
一葉のつかひし井戸に梅洗ふ
池に馴れ人にもなれて通し鴨
青潮の満つるや虚子の初句碑へ
汗の子の帽子斜めに帰りけり
白河の関を越えたる白雨かな
雨おとに強弱ありて胡瓜もむ
香具山につかの間の虹大きかり
湿りたる茅の匂ひや夏祓ひ
甘酒屋出て触るるや力石
梅雨晴や氣象神社の下駄の絵馬
しづかなる砂の殺氣や蟻地獄
山法師浮かべて水のやうな空

飛高隆夫選

内藤恵子
佐藤晴子
小池宗彦
網島清
吉中愛子
大木茂
谷田部栄
増田幸子
南雲秀子
山本絢子
草間三香子
小池宗彦
谷田部栄
飛高隆夫
増田幸子
中村千久
網島清
岡村純子
中村千久

木下閣池面に洩るる日のかげら
白河の関を越えたる白雨かな
青葉風蘆花トルストイ一つ馬車
噴水の向かうに見ゆる幼き日
新緑の洗ひ晒しとなりにけり

江見悦子選

青ぶだう甲斐の山々雲挙げて
黒南風や鳶の腹が迫り来し
睡蓮のひらきし今朝の水の張り
一里塚榎の青葉まぶしめり
国境の検問の列道をしへ
白河の関を越えたる白雨かな
黒ぬりの伏せ字も紙魚に食はれけり
湿原に蝦夷小林檜の花ま白
山法師浮かべて水のやうな空
光曳きゑのしま道を夏つばめ

「万象」同人句会七月例会

内海良太主宰選

面差しはいつも眼裏純子の忌
よくもまあ腹の減る子よ夏休み
をんな出す井戸しつらへて夏芝居
丑の日やうな重好きな病妹よ

平成29年7月30日
俳句文学館31名

山本とく江
谷田部栄
須賀允子
長谷川信也
網島清
増田幸子
浅井敦子
谷田部栄
増田幸子
須賀允子
谷田部栄
網島清
芝宮留美子
飛高隆夫
田中道江
須賀允子
谷田部栄
山本右近
三澤治子

残りたる射的屋一軒羽蟻の灯
ガウデイの大聖堂出てレモン水
陶片に茶碗の丸み草の花
スターリンの生家を訪ひぬアロハシャツ
高台に復興住宅立葵
滝壺を出て水音のまろやかに

小林愛子選

短夜や中也詩集に乘さず
迎火の風の变りて終りけり
七月の野麦峠は雨の中
残りたる射的屋一軒羽蟻の灯
陶片に茶碗の丸み草の花
川風に海の香からすうりの花
鍵つ子の鍵差す音や大西日
雲の影草取りの背を撫でゆけり
竹の皮将門の礎にころげ落つ
滝壺を出て水音のまろやかに

原田しずえ選

鯛の鳴いて濃くなる森の影
面差しはいつも眼裏純子の忌
漁火の同間隔の涼しさよ
九十九里飛ばされ癖の夏帽子
花火待つ屋形船の灯水に揺れ

田中道江
江見悦子
谷田部 栄
須賀允子
柳澤宗正
谷田部 栄

沢辺たけし
小林珠江
島野ひさ
田中道江
谷田部 栄
山本右近
吉中愛子
三屋英俊
古川京子
谷田部 栄
内海良太
須賀允子
古川京子
内海良太
藤田裕子

塩で揉む胡瓜日向の匂ひして 久留島規子
竹の皮将門の礎にころげ落つ 古川京子
朝霧の底より湧けり夏燕 山本とく江
吊橋をゆらす女や日雷 須賀允子
あけ放つ窓に潮の香冷奴 森岡恵子

▽中央句会 10月7日(土) 東京文化会館 午後1時より

▽同人句会 10月22日(日) 俳句文学館 午後1時より

「万象」同人会からのお知らせ

来年の同人会総会は次の通り予定されています。

・日時 平成30年4月2日(月)

・場所 東京都台東区民会館

・内容 会長以下役員交代。

その他の行事、議事は未定。

なお、詳しいことは、12月にご案内の予定です。

東 西 南 北

消 息 等

「万象」誌の紹介、「きたごち」8月号に「他誌紹介」の頁で国分恵美子氏が丁寧

に記述。掲載の句は左記。

大坪景章

三本の黄のチューリップ輪島塗大坪景章
凍滝に水の流るる音少し
内海良太

桐箱の蓋開けてある雛納

内海良太

狩の鷹雪後の天の真中より

玉田瑞穂

どか雪を総出て掻いて楳出す

阿部月山子

さみどりの蝶のひらく女井戸

比嘉半升

武井美代子さん第一句集『あしかび』

各誌で鑑賞

「笈」8月号、平田雄公子氏が17句を取
り上げ、「懸命にして真摯な句境が展開
する」と題して2頁に亘って鑑賞。最後
に「人事・景物の万端に亘り正面から取
り込む態度には深い感銘を覚えました」と
論評。

「さがみね」6月号、鈴木康久氏が14句
を紹介し、「三十余年に及ぶ作品には、眼
前の景と一体となり、句に遊ぶ心の素直、

柔和さが表現下に潜んでいる」と鑑賞。

「沖」6月号、「沖の沖」に紹介。

滝壺の芯より白き蝶の翔つ

「樵」6月号、「句々燦燦」に紹介。

紫蘇もみて甕のふちまで紅充たす

「俳句文学館」第556号、「日本の短い夏

長い夏」と題した一面記事に北海道の野

崎声山氏と並んで、沖繩の前田貴美子さ

んの文章「ただいま祈りの夏」が掲載さ

れた。その中に引用した句は左記の通り。

風いつも海風庭の青パ、パヤ

生きて炎ゆ摩文仁ヶ丘の祈り人

句会だより

福岡芙蓉句会 6月30日(金)、博多湾

に浮かぶ能古島の博物館を訪れ、展示物

を鑑賞した後、能古古窯跡や孔子廟など

を吟行し、句会。4名参加。

夏萩や島に小さき孔子廟 高山ひさ子

国際信号旗はためく今朝の男梅雨宮田千恵子

赤土の古窯の名残り梅雨の蝶 園田清子

新緑の萌え立つがごと能古島 石原好宏

純子忌「あかね」「白菊」合同句会

7月26日、二十六名が西光寺に集った。

中條睦子さんの司会で黙祷。井村和子さ

んの挨拶のあと、純子先生の遺影の前で

各々が献句を読み上げた。続いて谷渡末

枝さんが、「万象」7月号の「純子忌に寄

せて」の「金沢の人」を朗読した。休憩

後、一人2句投句の互選で句会。道場啓

子、宮崎恵美さんが披露した。

土用太郎ひと日を太き雨叩く

保田ひろ

風に現れ風に消え行く夏の蝶

高木艶子

夢の母追うて声かけ明易し

石川純子

朝の日に沼かたむけて尊舟

豊田高子

はにかみて未だ一年と糸取女

今越みち子

片陰に古地図掘げり城下町

河野尚子

炎昼や鳥くちあけ座り込む

道場啓子

句集出版

『小林愛子集』俳人協会の「自註現代

俳句シリーズ・12期22」として、8月1

日に出版された。昭和五十一年から平成二

八年までの全三百句は、二つの句集『阿

夫利』『辻菜師』に加えて『辻菜師』以

降の作品の中から自選したもの。

ご希望の方は編集部まで。一部五百円

でお頒けします。

(報・江見悦子)

新規会員を紹介します

姓 号

郵便番号 〒

住 所

投句者住所 〒

投句者姓号

電話

あとがき

▽今月号では「万象俳句賞」について十二頁を割いています。応募作品の中には、誤字や文法的な間違い、また今

一步の推敲が足りないために選にもれた作品がありました。折角の年に一度の大きなコンクール、来年に向けて、今からエンジンを始動させて下さい。(江見)

▽「万象俳句賞」は中村千久さんに決まりました。おめでとございます。審査結果を見ると会員の方の躍進があり、今後へ期待がふくらみます。今回は応募作品すべてについて、主宰が選

をされた一句ずつを載せています。応募された方々に敬意を表します。(文代)▽関東では梅雨明け宣言以来、はつきりしない日が続ぎ、農作物に被害が出ております。しかし、鶏は喉の渴きを癒す水を飲まないで水つぼぐない卵を産むとか。豚や牛も凌ぎやすいため成育が良いとか。裏表の話の聞こえと色々驚きます。(大木)

▽「特別作品評」、校正でもご尽力頂

いている水野加代さんに交代致しました。前任者が「センスの良さは俳句にも」と称賛された方です。奇しくも二代続けて俳句にゆかりの伊予の出身となりました。どうぞお楽しみに。

全国俳句大会の吟行句会、埼玉支部が担当いたします。多くの皆様のご参加をお待ちしております。(千久)

▽深まりゆく秋は旅の季節であり、とりわけ俳句吟行の好季節です。人が集まる場所での談笑が、どちらかと言えは苦手に属する私です。しかし、吟行に出掛けて草木や鳥の名前を覚えて貰うこと

で、自然に会話の仲間入りが出来て心相む思いをしております。まさに俳句の現場は人と人をつなぐと実感致します。全国俳句大会の有志吟行会も同じ場です。是非ご参加ください。(右近)

▽今年には異常気象が各地で洪水などの災害をもたらしましたが、東京では空梅雨でした。ところが八月に入ってから雨が続き、こんどは日照不足です。皆様の地方に、豊かな実りの秋が訪れます様お祈りしています。(規子)

会員を募ります

会員は左記の会費(誌代)を前納していただきます。

半年分 六、〇〇〇円
一年分 一二、〇〇〇円

会費の納入は左記の振替をご利用ください。新会員は必ずその旨明記。郵便振替口座 0230・0・103581

万象俳句会

住所変更等 住所変更、退会等については左記にご連絡願います。

〒285・09922
千葉県印旛郡酒々井町中央台1-17-12
竹澤 誠 治

万象 十月号

第十六巻第七号
通巻第一八七号

平成二十九年十月一日 発行

主宰 内海良太

発行人 小林愛子

編集人 江見悦子

〒241-1081
横浜市旭区笹野台三二六二二

万象発行所

☎〇四五・三六一・七五九一

平成二十九年年度「万象」全国俳句大会案内

開催日 平成二十九年十月二十九日(日)

会場 ホテルJALシティ田町(東京都港区芝浦三十一番一十八) ☎03・5444・0202

交通⇨JR田町駅・芝浦口(東口)より徒歩5分

当日の予定

大会 午後一時(受付正午より)～三時四十分

主宰挨拶、万象俳句賞、「万象」新人賞授賞、新同人発表、大会作品発表など

講演 飛高隆夫氏(万象作品選者)「木下夕爾の詩と俳句」

懇親会 午後四時～六時

会費 一万二千元(大会・懇親会を含む)

有志吟行句会 十月三十日(月)

吟行地 浜離宮恩賜庭園等(詳細は九月号77ページ参照)

▽JR浜松町駅徒歩十五分 ▽都営大江戸線「汐留」⑩番出口五分

句会場 港勤労福祉会館 第一洋室(港区芝公園一―五―二五)

申込み 十月十日(火)迄に葉書またはFAXで山本右近(048・864・8098)まで

平成二十九年年度「万象」全国俳句大会実行委員会

大会委員長 内海良太
実行委員長 沢辺たけし